



桃川藤林口演

高島政之助述記

西遊記

記

卷之四

東京

文庫堂發行

西遊記 卷四

第一席

桃川燕林講演
高富政之助速記

西遊記

悟空が三人の子供を助けてやるよ云ふに就いて陳澄陳清は
 め大きに喜ぶとび早速に是から乳母が抱いて参りました一秤金
 と云ふ女の子食はれに行くと云ふ矢先も精神も幾らか付い
 て居り申すは泣いて顔を上げ得ません様子悟空待つて居た
 が悟空ア、好い子だ、此處へ御出なさい、お前さんを危い
 所へ御連れ申しは致しません、昔さん御覽あさい、ソラ文を
 唱へて悟空身を躍らせるかと思ふと一秤金にあつて仕舞つて
 並んである家内の者は驚いて大勢何方が一秤金だか知れない

一

西

遊

記

位だ、不思議なことだ」と名々語いた、三藏御覽にあつて 三藏旨
 い、コレは御主人斯うおれば仔細はあい 陳澄どうも貴所の
 御徒弟は不思議で…… 三藏は術を心得て居る、悟空本の姿
 になつて宜しい、忽ちちの間、悟空本の姿にあつて 悟空御主人
 御覽なすつたか 陳澄拜見致しました 悟空で此處に居る八
 戒と云ふ男を、童子さんにして行くのでございませぬ、……八戒何
 をして居るんだ、此陳關保と云ふ子にゐるんだ 八戒陳關保、……
 …… 俺も色々やつたけれども 陳關保なごに始めてだ 悟空又
 愚圖々々言つてゐる、おらねへか 八戒今あるよ、是も成程福陵山
 に居て怪物の頭をして居ただけ、中々術を心得て居る猪八戒變
 化をした、悟空見て居たが 悟空、往けねへ、白痴だ、此野郎
 は顔ばかり子供になつたつて、身体が大きくつちやア仕方がね
 へ、此陳關保になるんだつてへことよ 八戒さう一廻には小さ

西

遊

記

くおれねへよ 悟空、撲るぞ、……野郎又小さくなるぞ、頭を崩し
 て……耳が下つてゐるぢやねへか 八戒、今直そよ 悟空唇が出
 て居らア、直さねへか 八戒、遊ろいたか、叱言ばかり言つてゐる漸
 くのこと、で出来上つて陳關保と並べて見た所が、是も少しも遊
 はあい 悟空、斯うおれば御安心でございませう 陳澄、何うも
 有難う存じませ、大きに安心を致しました 悟空、ソコでお二人
 を其邊へ置くど、村の者が驚ろきますから、村の者から先へ欺さ
 なければお置かせんから、真正の一種金陳關保の二人は、奥まつ
 た所へ入れてお置きなさい 陳澄、有難う存じます 悟空、其代
 り何うぞ、御匠様を大切に…… 陳澄、イエ貴僧には何のや
 うにも御懇意を致しませ 悟空、悟淨手前は御師匠様の側へ付
 いて居る 悟淨、宜しい承知した、左右する中に悟空、八戒の二人
 は一人は一種金、一人は陳關保になつて陳澄、陳澄の側に居りま

西

遊

記

する何うも陳澄陳清に於ても悉く喜ぶんで居ります、扱世の中は格別夜に至りまして、もう四つ頃はい、唯今の十時と云は刻限になりまじと村内の者は名々竹ばらを吹き或は鐘を鳴らし二盞の白木の駕籠を持つて名主の家へ参り泣聲をして大驚且那樣何うも御氣の毒様でございます、何ども申さうやうがございません、サア御送り申して参りますから……陳澄其所へ出て陳澄ヤ村内の衆が大きに御苦勞何うぞ靈感様の社へ行つたら置いて来て呉れますやう大驚畏こまりました、サア坊ぢやん此方へ……鎮ぢやん此方へ……二人共に其盞へ乗かつた旬もは出してやる者も涙に暮れ出て行く子供達に於ても泣いて居るが今日は又悟空と八戒だからエココ笑つてる村内の者が驚ろいた成程庄屋さんの子供衆教育が速うから泣きもしない感心なものだと思つてる、ワイ〜ワイ〜聲を揚げ

西

遊

記

忽ちちの間に之を靈感大王の社へ持つて来た、立樹も茂つて居りまじし、何となく物遊き社拜殿の所へ参り持つて来ました諸々の肉を積上げて、ソレから二人の者を其所へ下した、もう下しまするど村内の者は一人として立留つて居るどころでない、後をも見ずしてバラ〜逃げて歸つて来る、二人は社へ道入つた八戒、オオ阿兄々々、悟空、大きお聲を出さ、八戒色々物があるぜ食つても宜いかい、悟空、往けね〜、八戒、食つちやア私けね〜のか、あるものだから斯うやツていたつて仕方がねへぢやね〜か、悟空、八戒断はつて置くぞ靈感と云ふ奴が来たら逃しちやア往けね〜ぞ、其様お者を逃がそと崇るから締めて仕舞う積りだから成るだけ正体を現はすな、先方を捕まへて逃がさまいやうにして仕舞つて本相を現はして靈感と云ふ奴をやつ付けるのだ、八戒、宜しく〜心得た、悟空、手前は心得た〜

西

遊

記

と云つて時々突然本相を現はして仕舞うから往けねへ 八咫
 さう先言ばかり言つたつて往けねへ口へ物が這入つてゐるから
 悟空何か食つたな肉を食つたな 八咫此處にゐつたから食つ
 た 悟空食意地の張つた奴だ其中にグオー〜と一陣の風が
 吹いて来た 八咫来た〜 悟空黙つてゐる子供の前の所へス
 ックリ立上つたのを見ると身の丈九尺にもあらずと云ふ髪を
 捌いて何うも眼などの遊いゑと大變口は耳の邊りまで裂けて
 居る 靈感「ヤイ……」悟空此様子を見て居た 靈感今夜性體に
 此所へ供へたるは何者の子供か 悟空私くしは陳澄の子でござ
 いましたして一秤金と申しませる者、又此處に居りませぬのは陳澄
 と云ふ伯父さんの子でございまして陳關係と申する男の子
 でござります 靈感「フム毎年のやうに性體として此所へ來
 る者陳澄の名當人の名を聞くも口震え或は泣いて口も利けざ

西

遊

記

るに流石は名主の子である兩人共に能く震えずに居る毎年の
 やうに五穀成就の爲香が靈を慰さめる今日の祭禮に特禮とし
 て此所へ來りし者毎も女の方より食ふ筈なるが當年は陳關係
 の方から先へ食うからうと思へ八咫驚ろきやがつた 八咫「エ
 ーッ、靈感大王ソレは往けない、毎年女の方から食うと極つてゐ
 のに當年に限つて例を破ると云ふのは良くない 靈感黙れ、何
 方を食はうとも吾が勝手だ、一秤金の方は後でゆつくり食う、先
 づ陳關係の方から先にやるから靈悟をしろ」と突然八咫の肩へ
 ッームと手を掛けた、八咫驚ろいて 八咫「是は大變だもう是ま
 だと思つたから身を隠らして猪悟能八咫傍らに隠して置いた
 る熊手を取つたるよどにして 八咫「サア怪物來いと云ふて打
 つて掛つた、靈感大王大口開いてカラ〜と嘲笑つたることに
 して 靈感「斯様なことあらうと思つたり、サア來い、靈悟をしる

と忽ちの間に取出したる劍を廻して打つて掛る心得たりと互
いにチャン／＼と打合つたが中々八戒の及ぶ所までございませ
ん、烈しく打込んで参りまする様子、八戒驚ろいて 八戒阿兄何
うしたんだ、何をして居るんだ阿兄……悟空は平氣なもので
ございます 悟空、白痴無間に本相を現はすなど云ふのに現はし
やアがつて食はれて仕舞へ 八戒冗談言つちやア往けねへ阿
兄何を食つてるのか、二つ三つ取つといて呉んねへ 悟空、まだ
彼様おことを言つてる、其中に八戒受太刀になり危うく見まし
たので泣出した 八戒、ヤア、阿兄助けて呉れ 悟空、宜し
……と云ふと一秤金と見えたるのが、忽ち其姿を孫悟空と鑑
じたることにして本相を現はし、彼の如意棒を持つて鑑成大王
に向ふ、此場の次第如何相成りませるか、

第二席

鑑成大王毎年の如くに男女の子供を性醜に致し心得然る所
當年は一秤金陳保と音つて來つたる者が豈計らん一人は孫
悟空あり一人は猪悟能八戒あり一人の中に十分に勝を示
して居たが如意棒を取つて悟空現はれ出でたる時に暫らく打
合いました、が逆も叶はぬ所から雲に乗つて逃げる兩人も雲に
乗つて追掛ける愈々逐付かんとする時に通天河へ躍込んだ悟
空八戒の二人も共に水中に遁入つて様子を見たる所何方へ姿
を隠したるか其行術が知れまいさうでも、陳澄の所へ來つ
て却つて陳澄を始め師に恨みをやるやうなことがあつてはあ
らんから先ず一度歸つての上にしやうと兩人は立歸つた所が
右のことが早くも村内へ知れたものでございませから二十七
ヶ村の者は名々陳澄の家へ集まり何うあることかと思つて居
る所へ歸つて來た三藏、様子を見て 三藏行者如何致した 悟

西

遊

記

盜何うも破金もとせ脱しした全體此八戒の奴がも少し
 我慢をして居ると野郎を逃しはしませんが突然本相を現はし
 たものでございませからソレが爲に取逃しました全體此野郎
 は間拔か奴で……八戒元談言つちやア往けない唯さう云ふ
 と俺ばかり悪いやうだが毎年は女の方から食うのだが今年
 男の方から食うと云つて食掛けたから何ば何たつて食はれち
 やア堪らぬいからソレで本相を現はした三蔵併し常家の女
 子男子を助けたのは何より其變化は如何致した悟空通天河
 へ這入りました是は此儘にして置く私くし其が立ちました
 後で何をそるか知れません常家ばかりでない二十七ヶ村の者
 一同難澁をそるさう云ふみどがあつては却つて恐れ入りま
 私くしは是から八戒と二人で尋ねます何でも彼れは何に居る
 怪物に相違ございませんから河中を捜しまとるつもりで併し

西

遊

記

山に居る者で私くしの知らぬものはございませんが河の方
 に不得手で水は除り下さらぬいものでございませから万事は
 八戒を連れて是から捜しまとるから暫らく此處に御在下さいま
 すやう陳陳清之を聞いて喜こんだ兩人此場ばかり助けて
 下さるのでお後々のことまでして下さる實に有難いと言つ
 て一同の者は兩人を伏拜みまする様子八戒拜まれたのは初め
 てだニコニコ笑ひやがつて八戒エ、宜しうございませ御心
 配あさいませ私くしも只の八戒ぢやアはい是でも幾らか名
 の有る八戒だ悟空黙つてろ此野郎饒舌りやアがつて……サ
 ア行かうと云ふと二人は是から靈感大王と云ふ若を尋ねるが
 爲に通天河の様子を改ためて見ましたが知れない此方は靈感
 通々の体で自分の住家へ歸つて来た小怪物が大勢出て来て
 小怪エ、大王御歸んさい靈感ウーン、小怪何うなす

西

遊

記

つたのでございばと平常と遊つて大層元気がないやうで今日の御土屋は何うしました 靈感土産とよろちやまい食れ損なつた 小怪嘘をお吐きなさいお前さん毎も行つちやア食つて来るんぢやございませんか毎年極つてらア社へ行つて二人の子供を醜性に美味く召上つて肉が澤山供へてあるし、アイツを持つて来て下さるのを斯うやつて樂みにして待つて居るんで折はあいぢやございませんか 靈感折あんぞはね 小怪へエ 何したんでござい升 靈感何うにも斯うにも食損なつて仕舞うた 小怪へエー大王が其様にも青い顔をして太息を吐いて居あさるの何か事があつたに相違ねへ何うしたんで…… 靈感悪い奴はあの陳澄陳清の二人だ一秤金陳關保と云ふ飯鬼を出すと云ふことになつて名主の家の子だから平常から食物は良し嘘ぞ欺かだらうと思つて樂みにして行くと飛んでもね

西

遊

記

も有難ふ存じます。へエあんでございませんか此山には三人の大王が居ますのでどんな奴でございませぬ金星うれば三大王と云ふばもりでせう云ふ者が住んで居るか其邊は僕の興かる所であいの唯油断のないやうに 悟空イエ結構でございませぬ被仰る通りボンヤリ通つてどんな奴に出會はずか知ればせんさう覺悟して参りませれば宜しうござへませぬ 金星うれどもうれ迄同道しやうか 悟空有難うございませぬが併し大抵の者あらば私しも負けませんから大白金星と御同道下さるのは却つて恐縮しまそから一旦御歸り下さいまし 金星さう云ふことか ら勿々上天へ戻る何時かとも愈々願せんければならん時が あつたら一寸郵便でも電話でも掛けて知らせる 悟空へエひよつと手が足らねエやうでございませぬたら電信を打ちませるかどうか其の節は宜しく御願ひ申しますませぬへ宜しく被仰

西

遊

記

つて下さい申置いたかりに大白金星に於ては再び上天へ歸り
 まるる悟空は天部の神達が心配ををる位で見ると此の山には
 大變な妖物が居るに相違ない鬼にわれ師匠に其話をして置か
 ら少し時間か掛るだらうから又心配をして悟浄や八戒がノッ
 く山へでも上つて来ると却つていがねへと思ひましたるか
 ら一度山を下つて三人の居る所へ戻つて来た 八戒どうした
 阿兄何かするかへ 悟空居る 八戒居るへッ 悟空居る 八
 戒うれは餘程エライものかへ 悟空まだ其本物は見ねへが……
 御師匠様何てございます太白金星に會ひまして斯様々々報知
 して呉れましたして見ると餘程此山に住んで居る三大王と云
 ふ奴は通が自在の妖怪に相違ございません私しがみれから妖
 怪を退治に往きませるか貴僧はどうか此松林の邊りを離れない
 やうになそつて下さい悟浄は側を離れることはあらねへぞ八

西

遊

記

戒 八戒なんだへ 悟空手前は一時間乃公が歸らあかつたら
 山へ上つて来て呉れ若し手が足りぬへと貴様見たやうな馬鹿
 でも入用なことがあるから 八戒阿兄一寸待つて呉れ唯一時
 間経つたら来いで宜ぢやねへか馬鹿だけ餘計をやうだか 悟
 空餘計だつて手前見たやうな馬鹿はねへ又迎ひに来るときに
 途中で寝て居るお 八戒寝やアしねへ 悟空左様なら御師匠
 様往つて参りますから 三藏悟空此上共に其方の心算しに相
 成る實に今日迄の旅は其方が居あければ通ることも出来ん位
 で 悟空さう被仰つて下さると恐入りますすが太したことも
 さいまをまいからと師匠に安心をさせて置いて孫悟空は再び
 雲に打乗り彼の高山の峰嶺をさし彼方此方成べくたけ自分の体
 の隠れるやうにして来る松柏生茂つて居るさうも其山の有様
 と云ふものは何となく物凄ふございませ、カンラン／＼ 鈴の音

西

遊

記

がそるハツナ何か来るかと思つて居ると七八人の者皆を腰へ
 鈴を着けて首の所へ札を掛けて居がハツナ大層鈴を振つて来
 やアがる妖怪が出たな能く見ると小錨風と云ふ札で、そい
 つを胸へ附けまして各自に熊手を持つ奴もあれば槍を持つ奴
 もある皆な鈴を腰へ附けて居るハツナ山廻りの奴か知らん道
 奴等を一ツ騙して聞いて見やうと思つて悟空忽ちの間に變化
 をして向ふから来る奴の姿を見て其身にありました一本の毛
 を抜いて鈴とあし一本の毛を抜いて札として胸の所へ之れを
 着けた悟空程の者だが小錨風と書いてあつたのだが小の字が
 気が付かなかつたと思はれて大錨風と書いたカンラン／＼腰を
 振る度に鈴の音がするハツタリ出會つた出會ふと小錨風の者
 七八人ソラ出た怪しい奴だと云ふと突然四方より取忍いた悟
 空彼等を打つて仕舞ふ位は何でもないけれど殺して仕舞ふ

西

遊

記

うそれば宜い厥妻されば大王時としては風を起し雨を降ら
 せる自在に其術を行ふ今から此縦八百里ある通天河を十分に
 氷らせせることが出来やうか又今日雪を降らせると云ふことが
 出来れば雑作はあゝ靈感大王之を聞いてガラ／＼と打笑つて
 靈感大首には似たりと脚をも此通天河を氷を以て眼詰めるの
 が一時間経たざる中に十分に張詰め又雪を降らせるのことは
 今見る前に雪を降らして見せる厥妻ソレさへ出来れば大丈夫
 夫今先方は大王の行術を尋ねて居るに相違ござらんから此間
 に今より寒氣を増して雪を降らせるものと出立をすることが
 出来なから清澄の所へ留まつて居る其中に此通天河を十分
 に凍らせる先方では何うして此氷が張つたか三蔵始め悉と
 く疑念を起すけれども一通りでは中々其計略に乗る悟空でな
 いから其水の張つたる上を一日あり二日あり吾々共通力を以

西

遊

記

て車を押したり馬を引いたりして平地を歩くやうに往來を
 る、ソレを見れば必ら三藏先を急ぎ西天竺までの里程と云ふ
 たら宏大なるものであるから一日も心安く逗留をそる三藏に
 わらず、されば此水を踏んで通天河を渡らんとするに相違ない
 又彼の弟子共も供をして行くに違ひない、通天河の半途へ出た
 る時に術を解いて水を割り彼等主従を水中へ陥れる、水の中へ
 遁入りさへすれば此方のもの……大勢贊成々々何うも方々
 で贊成をしやがる、怪物の癖に贊成をせしなくつても宜いの
 に……靈感大王之を開いて大きに喜こび靈感何うも厭婆の
 意見至極宜しい、然らば其通り致さうと云ふので茲で一決致し
 まして一同の怪物は退散をそる、左右する間に靈感大王と云ふ
 奴怒ろしい神通力を得て居る奴と見ゑて忽ちの間に雪を降
 らせた、中々一里や三里の間であい、目の届く限りパツパと降つ

西

遊

記

て来た、悟空と八戒は色々尋ねたが知れないから歸つて参り、又
 明日も尋ねに出やうと思つて居ると恐ろしい雪でございます
 何處へも行くことが出来まい位、けれども悟空は悟空、八戒は
 かうぢやねへか、八戒阿兄今日は何うも行けねへ、此雪ぢやア
 仕方がねへ、俺は湯豆腐で一杯やらア、悟空此野郎食意地が張
 つてやがる、湯豆腐なぞを食つて居る時じやねへ、八戒ぢやア焼
 芋を買つて食はう、悟空此畜生……何うも恐ろしい雪で
 さいまをから陳澄も陳清も、兩人先づ兩徒弟は暫らく留まり
 給へ、此雪では出るまいと出来ない、當所は時に依ると斯う云ふ
 ことがあります、併し左程強く降る氣遣いもあからうから止む
 間……と云ふので待つて居たが三日ばかりと云ふもの少しも
 止まな、其内に漸く雪は止んだが通天河は一面に氷が張詰めた
 三藏此様子を御覽なまつて、三藏、八戒あの通天河と云ふ八百

西

遊

記

里もある川が悉く氷張詰め人往來をするが何だ 八戒へエ
 一 離い國でございませぬ、氷が一ぱいに張つたのに其氷の解け
 さい中に車を引いて通りませぬ、オ、牛車が通る、何うでございま
 す、人力車が通りませぬ、何うも色々なものを通りませぬ、三藏當
 所に留まつて其怪物を退治をして行くに云ふ悟空の意見は至
 極尤もものであるが吾れ又退ぞいて考へて見れば斯様なことに
 日を費しては勅命を受け出て西天竺へ参る其御奉公を輕んぶる
 やうなもの行くことが出来なければ仕方がない留まると此水
 の張つて居る所を越して行けぬとはあるまいから唯今より
 出立をしやうと思ふ行者は何うだ 悟空お止しおさい、何うも
 是は不思議でございませぬ、中々今時分に斯う雪の降るものでな
 い、此通り氷の張詰めると云ふことはございませぬ、事に依ると
 是は氷が怪しいかも知れませぬ 八戒、阿兄、阿兄は能くさう云

西

遊

記

ふけれども怪しい氷ではありやつて車を押したり馬を引張つ
 たりして通れるものでない、御師匠様の言ふ通り是は少しも早
 く出掛けた方が宜いせ 三藏、八戒、其方参つて何の位の氷であ
 るか、現場を見て参れ、向ふに見える通天河、幾許も道のりはない
 から行つて能く改ためて解けて崩れるやうなものか、又其厚き
 を改ためて大丈夫あらば越して越せぬとはお思いなから
 早々に此所を往來を致さう 八戒、宜しうございませぬ、八戒心
 得て熊手を携いて出て参りました、奴のこととてございませぬ、か
 破に改ためもしない、當人も出立をしやうと思つて居るもので
 ございませぬ、から歸つて来ると 八戒、参つて氷を踏んで見まし
 た所が大丈夫な氷でございませぬ 三藏、厚いかな 八戒、左様で
 ございませぬ、厚さは三間もございませぬ 悟空、馬鹿厚さが三間
 とは何だ 八戒、其位あるよ、何うして大丈夫なものだ 三藏、ン

西

遊

記

レあらば解げない中に少しも早く通天河さへ越して仕舞へば
 此先に大河はあいと云ふことだ陳澄陳清の二人へ右の次第を
 話しををるから二人は 兩人何うも恐れ入りました無理にも
 御引留め申して置きたいのでございませぬ併しあがら
 さう云ふことで御出立にあるものを手前共が難儀ををるから
 と云つて貴僧を御留め申を譯にもなりませぬ左様あら何うか
 御戻りには御立寄りをお願いいたうございませぬと云ふから
 イヤ必ら走戻る時には立寄るやうに致さう一寸した所から暫
 らくの世話に相成り辱じけないと仰有つて俄かに立つと云
 ふふどになりました何うも悟空は腹の中では是は危いと思つ
 て居るけれども故隙を言ふと又何うでもない御師近様に賢極
 む呪でもやられると大變でございませぬから 悟空ソレならば出
 立をせしませうとイヤイヤながら自分於ても出立ををるゝと

西

遊

記

にあり陳澄陳清等は多くの送り物を其所へ持參を致し何うぞ
 之をど云つたが三藏中々金銀を願見るやうな御人でございま
 せんから何と言つても御受けおさいません三人の徒弟は師匠
 の教訓が宜しいものでございませぬから兩人より送りませる金
 銀は一切之を手にしさい食物を送られましたから是は喜みん
 で名々持てるだけ食物或は果物の類ひを携さへまして別れを
 告げて立出でる大勢で七八町の間送つて参りまする扱馬へ召
 されまして依俟三藏に於ては彼の通天河の氷を渡ると云ふ
 とにかつた八戒沙悟淨悟空の三人は馬の側へ付いて來ると成
 程牛車を引いて來るやう人が續々通る雪の朝極く天氣の好い
 日で渡つて仕舞へば何事もないと思つたから悟空其儘にして
 馬へ付いて來る既に通天河の半ばの所へ來ると豫て厥婆を始
 めとして水中に居りましたる者思ひ通り三藏師弟が参りまし

西

遊

記

たるから大きに喜び中にも靈感大王に於ては忽ちちの聞結
 んでありましたる術を解いたものと見へてグワラくくと
 物音が致そと水一時に解けました様子、何かは以て堪りませう
 既に何れも川中へ落らんとしたり、此時に悟空身を躍らした
 ることにして中天へ飛上がりました、八戒も沙悟浄も其の術を
 心得て居るから此所を飛上がつた、飛ぶよどの出来おいは三
 藏法師肉体でお在さるから、アレツと云ふ中にツツと通
 天河の中へ引き込まれました、様子今まで厚氷の張り詰めて居
 たと思ひました所、取て氷なと云ふものは少しも見え、是ま
 で四方の山々雪の景色美しく思ひましたのは、這は抑も如何
 に、残雪の景色も何も消えて仕舞ひました、ヒツクリ驚ろいたる
 彼の悟空 悟空失策つた、ソレ見やがれ八戒、此様おこつたらう
 と思つた 八戒大變だ、離いことをしやがつたお、落込つちやつ

西

遊

記

第三席

た 悟空早く行つて師匠様を見なければ往けねへ 八戒早く
 行くつだつて往けねへ、櫻が解けた 悟空馬鹿野郎め此騒ぎの
 中で、櫻おんぞを締替へて居やがる、茲で悟空八戒沙悟浄の三人
 共々に通天河へ乗込みました三藏の渡は如何相成りまするか
 次席に於て申上げませ、
 第三席
 豫て水中に待受けましたる靈感大王、小怪物へ下知を致し、忽ち
 ちの間三藏を縛り上げたけれども、斯うして居る中に大勢此所
 へ乗込んで來ると面倒だ、即ち己れの住所水雷洞と云ふ所へ
 連れて参りました、厥婆は其所へ出て來て 厥婆大王宜植梅に
 参りましたお、靈感ウム幸ひ貴様の計略が成就して好都合に
 行つた直に三藏から先へ食ちませう 厥婆、ソレは大王暫く待
 給へ必らず悟空八戒等三藏を尋ねに參るに相違ない、彼等を生

記 遊 西

細にして其上で遊んで置いて召上がつたら宜からう何れさう
なれば大王一人では食切れぬから分けて下さる此三藏一人
を大王が召上がるは至極宜いやうたけれども外の者がソレが
為羨ましく思ふ是は一旦石半へ留らく入れて活かして置いて
同じことあら死んだのを召上がるより活きて居るのを召上か
つた方が宜いと云ふので三藏を見るく間に六尺四方の石櫃
の中へ縛つたなりに差入れましたけれども息の抜けるやうに
なつて居る三藏を此中へ入れて置いて其中に三人を生捕四人
を並べて置いて事を逃げやうけれども迂濶なこととは出来ぬ
恐るべきは悟空でございませぬから其悟空一人を何うかと思つ
て色々怪物の方でも悟空を生捕ること考へて居る孫悟空は
自分から先へ遣入り八戒も入れて色々尋ねた幾ら尋ねても師
匠の所在が知れない仕方から先づ一旦陳澄の家へ戻つ

西 遊 記

て来たから陳澄大きに驚ろいて 陳澄何かさいました 悟空
何したところでもない飛んだことをした見通りの次第である
氷は怪物が張らした氷だ頭師匠は水中へ落込つて私共は術
を心得て居るから空へ飛上つたが師匠は怪物の爲に取捕
まつて捜して居るが所在が知れない何うか常分三人を置いて
お貰い申したい又居る居る譯ぢやねへお尋ね申して師匠様
を見當り次第に御連れ申して来て……事に據つたら水浸しに
でもおつてやしねへかと思つて…… 陳澄大きに御心配で恐
れ入ましてございます手前共もさう云ふ次第で見ると和濟み
ません 悟空何しろ手別をしなければ往ねへ沙悟淨手前は是
から南の方の海を捜せ俺は北の方を捜すぞ八戒手前は西の方
を捜せ八戒宜心得た 悟空心得たちやアねへ全休手前は横
着で往ねへ能く何だせ改ためて行もしねへで行つた恐恥をす

西遊記

るな 八戒大丈夫だつてへことよ茲で手別をして扱さうと云ふことになつた所が悟浄は是は又師匠思ひだし、悟空の言ふこととは決して背かきい八戒の奴は時々酷い目に逢ふから孫悟空と氣が合はない別々になると八戒、箠棒め阿兄々々と言へば宜い氣にあつて威張つてやがる彼奴の指環を受けるのぢやねへ幾ら扱したつて知れるものかど口小言を云ひながらスタスタ歩いて居る様子を見た悟空がハテ彼の野郎は行かぬへなど思つたから忽ち小さあ虫にあつて八戒の耳の所へ止つて喰着いて行つた八戒の野郎其様なことば知らないから 八戒何處を扱したつて居やアしねへ馬鹿々々しい此様を問拔なことがあるものかエーコ一寐やうか知らん師匠様が茲で璽威大王に金殺されて仕舞つては西天竺へ行く必要はねへ西天竺へ行かぬへとすれば是から歸つたつて宜い歸る段になると悟空の奴あ

西遊記

んぞは何でもありやアしねへ彼奴は此方等から見ると術を深山知つてるから威張る何でも先に出やアがつて人のことを馬鹿々々つて奉公人同様に思つてやがる、けれども師匠様は良いただ、おれは本統の人だ、悟空なんぞは猿の怪物だ、悟空耳元で聞いて居た、野郎始めやがつた、手前も怪物の癖にしやがつて……何うして呉れやうと思つた、小さな針を取出して唇をチヨツくと突刺した 八戒ア、痛た、是は痛へ……待てよ俺は日外寝て居て悟空阿兄に突刺されたことがあつた、來て居るかも知れない、コイツは悪くは言へねへ……何うも悟空と云ふ阿兄は剛へや賊にソレは大したものだ、剛い、又氣を取直して奴ノソ、歩き出した 悟空、八戒貴様のやうな奴はねへな 八戒、居るのかい阿兄は…… 悟空、貴様の耳に止つてる 八戒、エ、往けねへな喰着いて來ちやア…… 悟空、人のことを色々悪

く言ひやがつて……八戒、勘辨して呉れ、ツヒ言つたんだから
 是から一人になつても迂湖油跡は出来やアしねへ左右して居
 る所へ悟淨がザツ／＼ザツ／＼出て来た。悟淨何うした悟淨
 悟淨漸う目付けた。悟淨居たか。悟淨イヤ居たか居ねへか知
 れねへけれども水窟洞と云ふ額が躍つて大層立派な所がある
 悟淨ちやア斯うして呉れ、俺は水の中へ長く居られねへ陸へ上
 つてるから二人は其水窟洞と云ふ住家を叩つて壊して靈感大王
 と云ふ奴を引張出して来い宜いか上へ上りさへすれば何うで
 もあるから。悟淨ちやアさうしやう。悟淨頼むせ。二人宜し
 悟淨に於ても一旦水中を出でましたることにして上つて来る
 のを待つて居る。二人は熊手を遣いでドン／＼ドン／＼悟淨の
 案内に連れて来て見ると成程大層な構造でございませぬ、煉化
 の塀か何かある、鐵柵があつて何うも大層立派な額が懸つて居

るのが水窟洞。悟淨此處だ／＼ドン／＼ドン／＼打叩いたが
 締り嚴重でございませぬと云ふのは万一此所へ来るやうな
 があつてはあらぬと思ひませぬからソレで締りを嚴重にして
 居る所へ打叩いたるものであるから小怪物達が見ると一人
 は沙悟淨あり一人は八戒あり二人致して暴れ込んで来た。一
 ゆゑ小怪物之れを支へんとする間もあく忽ち門戸を打壊し
 た、様子でございませぬ、ソレ八戒が来たり、沙悟淨が来たりとあつ
 て奥へ之を注進致したることゆゑ厥婆を始めとして靈感大王
 靈感、十二人此所へ来たつたか、オ、悟淨だに来たらざれば
 兩人位何でもまいど忽ちちの間靈感大王其の所へ姿を現はし
 た有様身の丈九尺に勝れたることにして髪を捌き両眼に於て
 は明星の如く斧を廻して打つて掛る様子心得て、八戒、沙悟淨而
 名致して靈感大王に打つて掛る暫らくの間と云ふもの打合は

西遊記

せて居る、其の間に小怪物八方よりして集まり來たり、兩人を支へるやうにするから、茲で沙悟淨大音に揚げたることにして悟淨八戒俺が多くの小怪物を對手にするから貴様は靈感大王を對手にして八戒心得たど八戒熊手を振つたることにして靈感と打合はせて居る其の中に靈感大王の勢ひ強くありましてたものど見えて、八戒受太刀にありまして逃出す様子、固より逃げて來て靈感を上げさへすれば悟空之を撃取らうと云ふ約束でありますから出るかと思ふと何うして靈感大王も心得て居る是は勝出すに相違ないと思ひましたから其儘に致して何方へ姿を隠じたか知れまい、靈感大王が何方かへ逃げて仕舞うか付いて居る小怪物に於ても逃げて仕舞う、尤ども取つたのも大勢ある悟淨何うした八戒八戒逃がして仕舞つた悟淨ソイツは飛んだことをした併し此廓園の中へ這入つて見

西遊記

れば何處かに師匠様が居るに相違なからうから師匠様の所在を捜さうソレから段々調べた所が何處へ隠したものだか全然三藏の様子も知れませぬから據どころなく立ち歸へつて右の次第を申し入れると悟空は足せりをして残念がもました當人を退治しないばかりでなく師匠の居所が知れない事に依つたら死したるものではないか食はれたやうなことがあつては宜しくかいと思つたが水中のことは悟空自分一人の方らの及ぶどころでござりません、是れから南海の觀世音の許へまいりまして其の様子を相尋つね茲に怪物の正体をば現はすと云ふの

第四席

悟空八戒沙悟淨の三人も心は矢竹に早ると雖も後の靈感大王の爲に氷は碎かれ師匠三藏は怪物のため生捕られ石槽の

西遊記

中へ入れて空気の通りやうに致して其儘何方へ隠したるか二
人も色々相尋ねましたか三藏を助ける譯に往かず風々悟空に
於ても靈感大王と鉢を交へると雖も彼れ及ばざることにな
れば水中に入つて姿を現はさず之に就いて八戒沙悟浄も頻り
に眼剛を拭むると雖も愈々靈感は危こきを知り鉄門を嚴重
に閉して居りますから今は如何共破つて此所へ這入ることも
出来ず三人の徒弟等に於ては悉く胸を痛め中には悟空は暫
らく考へて居たが悟空八戒是は何うも飛んだことが出来た
此方等に何んか所へ捕まつたつて驚ろきはしねへが師匠様は
肉体で在つしやるから斯うして居る間に食はれてでも仕舞う
か息を引取つた日には折角御供をして来た甲斐もねへと云つ
て斯鉄門の締りを嚴重にして水中に彼の隠家があるに相違な
い無沙汰をして居るから成るだけ行くめへと思つたが斯うな

西遊記

れば仕方がねへ南海の普陀洛山へ行つて觀音様を一つ御願ひ
申して来るから其間手前達は此岸に居て怪物が来たら二人で
退治して仕舞へ師匠様は何でも石櫃か何かに入つて居るに違
いない此間闘ひをしながらの話しを聞いたが此方三人と師匠
様と四人を並べて置いてから食ふと云ふのだして見ればまだ
一命は助かつて在つしやるに相違ない長く斯うして居る間に
食はれて仕舞うと仕方がない俺が一寸行て来るから悟浄ぢ
やア阿兄斯うおつちやア仕方がねへから一つ觀音様を御願ひ
申して其間八戒と二人で番をして居るから悟空八戒 八戒
何だ悟空何だぢやねへしッかりしろ手前が茫然して居から
此様もどが出来 八戒悪みどを云ふと俺は「かりだお 悟空貴
様が一体氷の様子を見て來時に此氷は怪しうございませと薄う
ございませと云へば師匠様だつて乗出して行きやアしねへ氷

西遊記
 の厚さが三間もあるふんで嘘ばかり吐いて手前のやうな嘘吐
 きはねへッツかり番をして居る寝ちまうか 八戒宜よ番をし
 て居るよ 悟空陀度言付たぞど、悟空直に勸斗雲を呼んで此雲
 へ乗りまもるも忽ちちの問南海の普陀洛山へ参りました雲を
 下つて來つて見るに諸々の神達寄集ふて居る 悟空へエ賊に
 暫らく御無沙汰を致しました 神イヤ一齊天大聖何した久く
 見ぬいさ 悟空へエ師匠様の供をして西天竺へ行くのでご
 ざいますから何うもモウ怪物の多い所ばかり通るのでござい
 まそ 神魔ぞ心配であらう何思つて今日ば見えた 悟空エ、
 旦那様は在しやいまもか 神アノ今まで新聞を讀んでお在る
 すつたが退屈をしたと仰有て竹林へ一人で入しつた 悟空さ
 うでございますか 神も少し待てるが宜い今にいらつしや
 るだらう 悟空待て居られませぬ急用の用が出來たんで御願ひ

西遊記
 申したいことがあつて來たのでございませうから…… 神サア
 お茶を一ツお上り 悟空茶どころではないのでぢやア御免な
 さいソコで竹林へ來つて見ると觀世音菩薩平常のお扮装で
 さいます貴郎の平常のお扮装と云ふのでございませうから結城
 紬の床間衣に縮緬の兵児帯か何か巻いて椅子へ腰を懸けて頰
 りに竹林にありまを竹を取つて爪の先で之を割いて籃を編ん
 で在つしやる様子、遠くから三拜を致しましたる孫悟空 悟空
 エ、賊に暫らくでございませう、毎も御壯健で在つしやいまし
 て結構なことだ 善國オツ悟空如何致した、大方今日あたりは
 其方が参るかと思つて居つた、定めし三藏にも難儀致したであ
 らう、西天竺へ掛つたな 悟空さう御存じで在つしやればお話
 し申す所はございませうが今度と云ふ今度は酷い目に遭ひま
 した、私くしも西天竺まで恙なく御供をして如來を拜したいと

西

遊

記

思ふし師匠様も私くしが居なければ心細く思召して在つしや
 る一度は阿呆の八戒の言ふことを用ひて私くしを遠ざけて御
 覽にありました私が私くしも別れ申そは必持が悪うございま
 す今度通天河へ通り掛ると様々なことがございましてがソレ
 はお話し申しません厚水が張つて居て人馬が通る先を急ぐか
 ら行かうと仰有る私くしは御異見をしたので何うも水の張る
 時節ではあしソレに水の張り方が可笑しいからお止しませい
 と云つた所があの阿呆の八戒奴自分で見て來ると云つて通天
 河に張詰めて居る水を見て厚味が三間もあるの牛車が通るの
 何の色々言ふし全たく通りましたものでございませから師
 匠様も御出掛けにあり途に水中に落りました師匠様は怪物の
 爲に生捕にされました何うかと思つて色々圓ひました所が何
 分力は其機に強いのではございませんけれども水の中へ這入

西

遊

記

ると自由自在で私くしは御存じの通り水は往けおいものでご
 さいませし八戒や沙悟淨ぢや往か石門を嚴重に固めて締り
 が付いて居りますから破つて這入ることが出来ません其中に
 師匠様が殺されて仕舞ひますと何んかに私くし共が氣を揉ん
 だ所が甲斐がございませんお願ひ申しに來たのでございます
 が何うかお助けなまつて下ることにはありませませいか菩薩
 委細承知致した大方其方が迎ひに參るであらうと心得た實は
 ソレを察したるから今通天河に居る變化を入れるものを拵ら
 へて居る悟空へエー竹細工をして在つしやる何うも閑暇で
 在つしやるものだから竹細工をして博覽會へでもお出しませ
 るかソレども勘工場へ賣物にお出しませるのでありませか
 菩薩さうではあい此中へ其怪物を入れる悟空其様お小さ
 監の中へ這入る怪物ではございません私くしは二三度打合ひ

西

遊

理

ましたか何うも變な面おもてでございませ、眼めが飛と出して居ゐて、力ちからも
 可た成りありませ、菩薩ぼさつイヤ、大事だいじかい三藏さんざう既に死しに至いたるゑ
 も近いやうであるから猶豫うゑをそる所ところでない、直ただに是こゝから行いか
 悟ご空くうソレは有あ難がたう存ぞんじます、今いま召めい物ぶつを持もつて來きませう、菩薩ぼさつイ
 エ取と急いぐから是こゝで終はらう、悟ご空くう、寢ね間ま衣いで宜よろしうございませ、か
 貴き郎らうのこゝでございませ、から何なに處ところへ行いつたつて、觀くわん音おん様さまは觀くわん音おん
 様さまで寢ね間ま衣いに觀くわん音おん様さまが居ゐるのは大たい抵たい極ごくつて居ゐませ、菩薩ぼさつ貴き様さま
 は口くちが惡わるくつて往いけあ、早はや速すみ御ご自じ分ぶんに於おては、お支し度どをなさい
 まして一ひとツの籃かごをお提たげ遊あそばして御ご立た出でになつた、左ひだり右みぎを
 に紫むらさ雲ぐも引ひくと云いふから、紫むらさ色いろの雲ぐも出で來きます、其その雲ぐもに
 ばした様子ようす、悟ご空くうに於おては、筋すぢ斗と雲ぐもに打う乘まりませ、其その雲ぐもに
 一體いつたいを爲なし、悟ご空くう、賊ぞくに色いろ々々有あ難がたう存ぞんじます、又また行いつて、働はたらか
 ければあらいこと、が出來でませ、した何なにれ、此こゝ中に錢ぜにくり上ありませ、

西

遊

記

らう……と一同いっとうに一ひと首くびを殘のこして置おいて、其その筋すぢ斗と雲ぐもを早はやめ、取と急い
 いで申まを上げたる、通と天てん河がへ來きつて見みると、河が岸ぎしの所ところに熊くま手てを携もた
 へて沙すな悟ご淨じやう圓えんの眼めを刺さし、出でして水みづ面めんを睨にらんで居ゐりませ、様さま子こ其その儘まま
 の所ところに八はつ戒がい横よこになつて、寢ねて居ゐる耳みみを引ひ張はつた、八はつ戒がい起た上あつて
 へ、參まゐり八はつ戒がいのダラリと下くだつて居ゐる、悟ご空くう馬ば鹿か奴ぬの位ゐ言い付けて置おいたのに、寢ね
 八はつ戒がいア、痛いたい、悟ご空くう馬ば鹿か奴ぬの位ゐ言い付けて置おいたのに、寢ね
 て居ゐるやがる、八はつ戒がい阿あ兄あにも歸かへつて來きたのか、まだ歸かへりやアしな
 からうと思おもつて……、悟ご空くう酒しゆ具ぐへや此こゝん畜ちく生せい酒しゆを食くつたんだ
 らう、八はつ戒がいナニ餘あまり何なにだもんだから、今いま柳やなぎ飲のみをきめて來き、悟ご空くう
 思おもひ、奴やつだ、只ただは置おかぬへぞ、八はつ戒がい何なにうぞ勘かん忍にんして呉くれんねへ
 悟ご淨じやう附つ罪ざいつて呉くれんねへ、悟ご淨じやうだから言いはねへとつちやアねへ
 阿あ兄あにが歸かへつて來きるから、無む開かいに飲のんちやア往いけねへと、言いつたの
 だ、八はつ戒がいブランダを飲のんだものだから、大たい變へん醉ざいつちやつた

西

遊

記

悟空彼所へ觀世音が入來つしやるから行儀を直さなければ往
 けぬへ 兩人ソレは大變だ所へ需雲へ乘られまして菩薩御姿
 を現はし給ふ、八戒沙悟淨共に禮を施こしました様子、此時に普
 薩雲を下つて通天河の此方に來り給ひ 菩薩其方共其場に見
 物致せ、吾れ今變化を必らずや此籃の中へ入れて見せしむ
 りまして御取出しになつたる五色の糸、其糸に籃を結び付けた
 るみどにして通天河の中へお下し遊ばす、其糸の長いみど膠だ
 しく重金が付いてる罾でもないが速かに籃は水中に沈みまし
 た暫らくして菩薩之を汲上げて居る中に漸く水を離れる、籃は
 お手許に至りまゐる様子、三人は様子を覘ふと退は抑も如何に
 籃の中に錦魚が一疋遁入つて居ります、悟空之を見て 悟空、
 アー錦魚が遁入つた 菩薩如何に悟空最早斯の通り魔物は余
 が籃の中に蹴めたれば汝等水中に至り早く三藏を助けよ、最早

西

遊

記

石門の締りもあければ早く登つて石櫃より三藏を出せやうに
 致せ 悟空へエー先刻より致して吾々へ對し敵對なし、且つ又
 師匠を苦しめましたのは其錦魚でございませるか 菩薩如何に
 も是は逆油に入れて置いたる錦魚、朝夕教文を聴き勞々する中
 に早くも其術を知り多くの手下を奪め、逆油を出て此通天河へ
 來つて諸々の怪物を築め、其中の首領とあつて多く人を惱ます
 の由を尋て聞くことゆゑ其内には之を引上げんと思ふて居た
 るに思い懸けなく此度三藏師弟の難儀を出したり、依つて吾此
 錦魚を引上げる上は最早此通天河に害を加へるものあるべか
 らず 悟空へ、一恐れ入りしましたることございませ 菩薩
 久々にて三歳にも逢ふて彼の無事を尋ね遣はしたい早く此所
 へ案内を致せと仰せられたることゆゑ直に是から三人共に水
 中に入りましたるみどにして、様子を見れば大勢居りまゐる小

西遊記

怪物は大方其所に落命を致して居りまほ、中にも鐵門の締りは破れて居りまほ、こゝゆゑ、喜こんで其所に至つて見れば、石櫃のありまほ、様子、六尺四方の石櫃で、中々人力を以て之を釣出す。この出来、品、併しながら、悟空八戒沙悟淨三人でございませ。すから、易々と其石櫃を引出した、其中におつたる三蔵は、只聲を揚げて泣いて在する。三蔵、吾れ幼年よりして、嫁娶苦勞をそると雖も、今日、の如く、難儀に落つたること、おし、使りに思ふ。徒弟等は、何方へ罷越したるか、吾を救ふことも、能はずして、此處に怪物の腹を肥す、みどに相成るか、情無きみどありと、慨く聲が早くも聞えたるから、悟空雷の如き聲を發したることにして、悟空師必ら、愛い給ふな、孫悟空御迎いと、して、此所へ参つたりと云ふ聲を聞いて、其櫃の中に在したる三蔵、大いに喜こび給ふて、三蔵行者、此所へ來り呉れたるか、悟空拙者一人にあらせ

西遊記

沙悟淨八戒も罷越したりと云ふ中に、到頭、其石櫃を破つて、師の手を取つて、其所へ引出したる時に、三蔵は、衆生の思いを爲したることにして、三蔵、悟空毎も、能うみを吾を救い呉れたか、汝無くば、吾西天竺へ廻くこと、思ひも、依らず、辱じけなしと、あつて、悟空の手を取り、押蹴きまする様子、悟空其手を拂ふたることにして、悟空、イエ、拙者一人の力の及ぶ所にあらじ、南海の觀世音菩薩、此所へ來り給ふて、云々斯々の次第、早く御拜を御送げ遊びすやうに……と、あつたるから、仗柴三蔵法師、大いに喜こび、三人に伴はれたることに、して、東片に出で、様子を見れば、紫雲の中に、菩薩侍んで、在遊ばし、籠の中に、一尾の錦魚を入れたるを、お捉げ遊ばしたる姿を見て、三蔵へ、エ、有難しと、あつて、三蔵、此所に於て、九拜を致し、まほ、其禮拜をそること、法に遊び、菩薩に於ては、金鈴を鳴らす如き御聲を發し、菩薩三蔵

西遊記

あり、又宿りまゝする所にも困らぬ。此處梅で西天竺まで送れば、誠
に宜しうございます。三蔵行者其方の申を通り怪物の多い
所に至れば、其方等も心配であるし、野僧も悉く心配を致たす
悟空、何うも岸の柳の景色と云ひ、此川水の奇麗あること、恰然水
品のやうで、此川を越さなければなりません。渡船が彼處にあり
まゝ、……八戒船を呼べ。八戒船を呼ぶのかい。船々と呼ぶのか
い。悟空、始めても渡しを呼びはしめへし、船頭と呼ぶのだ。船
々ど云ふ奴があるか。八戒船を呼べと云ふから、船と云ふのだ
と思つた。悟空、揚足ばかり取つてゐる、擡倒とぞ。八戒、阿兄、後生
だからソレだけ止して呉れ、阿兄に撲たれると十日ばかり痛
いから……オ、オ、オ、悟淨、オ、オ、オ、八戒、悟淨の二人牌を掲げる
兩人、居ねへか。船頭と呼ばりました。時に向ふの小さな家から
立出でたのは年の頭六十ばかりにありまゝ、婆さんが出て来た

西遊記

から、ハテお老婆が船を漕ぐのか知らん。是は何うも奇想だ。見
て居ると右の老婆は船へ乗移りまして、緊細を解いて棹を差し
たがさゞで深くはないと見へて、追々ど此方の岸へ来たりま
老婆、大きに御侍でございました。サア、お乗りあさいまし
悟空、婆さん大丈夫かい。老婆、何が大丈夫でございます。悟空、
何がつて人を乗せて漕ぐかい。老婆、へ、へ、飛んだことを仰
有います、私は始終漕いで居りまゝから、其様なことは決して御
心配なさいませぬ。云ふ中に三蔵は馬を下りまゝ、早くも婆さん
んは船の中へ白馬を引入れまゝ、荷物などを其所へ運ぶ。誠に手
順が付いて居る様子、三蔵大きに喜ぶんで、悟空ははじめ三人の徒
弟も皆な乗込んで仕舞う、速やかに棹を漕ぎ、船を出す。何うも
其景色の美しいこと。三蔵、八戒、餘程美しい景色だ。八戒、何うも
美しい景色で誠に心持が宜しうございます。悟空も餘り好い心持

西

遊

記

だし先割から眠くなつて居る、歩いて居ればそうでもないが足を休めて船へ腰を懸けて居る中に少しウトウトと眠りました。三藏「老婆々々、老婆ハイ、三藏、幾歳にあるか、老婆ハイ、長老私くしはもう六十になりませう、三藏、イヤ、老て斯様な荒仕事を致すと云ふのは中々剛い、伴と云ふものか、良人が不在で、もあつて代理に此船を漕ぐのか、老婆、エ、宜しうございますと、も、へ、一、三藏、何がへ、一、だ何う云ふ譯で斯様に年を老つて荒仕事を致して居るか、藝さんは何と言はれても返事をしない、ニヤ、笑つて船を押して居ります、三藏、八戒、何うも良、い水だな、先刻少し、塩辛いものを食べたと思つて、大分咽喉が乾いて往かん、少々水を欲しい、此器へ聊か汲んで呉れまいか、持つて在しつた鉄鉢を其所へお出しなすつた、八戒、私くしも水が飲みたうつて仕方がございませぬ、ぢやア、一つ汲みませう、鉄鉢

西

遊

記

を二三盥洗つて水を汲んだが、ガブ、飲つて居る、三藏「コレ、其方が飲むのでは、お、野僧が欲しい、八戒、今御師匠様へ上げるのでございませぬ、が御毒味をして居ります、三藏「毒味をいつまでして居る者があるか、八戒「ソレでも能くお毒味をしない、と往けません、……何うも、良、い水でございませぬ、甘味のある甘露水でございませぬ、サア、お飲みなさい、と鉄鉢へ汲んで出した、三藏「ソレを飲んで、三藏「ア、成程、良、い水だな、八戒「餘程、良、い水でございませぬ、八戒「又、ガブ、ガブ、飲つて居る、左右をみる間に、船は若く三藏は行んで、教文を唱へる、出家と云ふものは、船へ乗らうが、縦んば、宿へ着かうが、直に經を讀むべきもの、ださうで、教を讀んでお在る、おさる、壁にウトウトして居りました、悟空「ア、一、何うもウトウトして居る間にもう着いたのか、渡し、錢を拂つて、三藏法師馬へお召し遊ばして、トイ、トイ、行つしや

西

遊

記

る渡場から彼是れ二里ばかり参りませと 三蔵ア、痛いく。
 ウーン……上にお在遊ばしたる三蔵俄かに腹痛でございま
 してもう馬へ召すことも出来ない様子 悟空何うかなさいま
 したか 三蔵腹かに腹が痛んで参つた 悟空ソレは往けませ
 んあ、水變りでもございましてらうか 三蔵ア、ウーン……馬
 上にお苦しみ遊ばしまそ様子、とると熊手を搦いて供をして來
 た八戒の奴め 八戒オウ痛系く、ア、痛いく 悟空馬鹿靜
 かにしろ 八戒靜かにしろつたつて、ア、腹が痛くなつて來た
 痛えくく 三蔵ウーンく、掛合でやつて居る、沙悟淨は其
 所へ参つて八戒を介抱をせよ、落馬でもしてはありませんから
 悟空は法師をば下し申上げて頻りに擦つて上げたが何分にも
 痛みが段々強くある 三蔵行者其邊りに家があらば暫時其家
 を借りて手當をして呉れ、何うも腹痛甚だしくあつた 悟空左

西

遊

記

様でございますか、ソレは何か召上りは致しませんか 三蔵最
 前其方が思眠つて居る間に唯今の流れで咽喉が乾いておらん
 から聊か水を飲んだ 悟空其位のこととで別段に水中りでお苦
 しみをさる際もなからうかと存じます、兎にあれ往來だから仕
 方がございませぬ、……ソツかりしろ八戒、貴様は何うしたのだ
 八戒御師匠様が水を呉れと仰有るから御師匠様に水を汲んで
 上げる時に俺も召上つたんだ 悟空自分で召上ると云ふ奴が
 あるか 八戒痛いく、ア、痛たいく、ウーン 悟空騒わくな
 八戒騒ぐなつたつて痛系から仕方ねへ、オウ痛系く、手が付
 けられぬ、悟淨仕方がないから八戒を食つて参ります、三蔵
 を助り傍ら馬を引きおがら参ると宜い塩梅に向ふに家が見え
 る漸う其所へ這入つて参ると老婆が二人居ります 悟空老婆
 や誠氣の遊だが少し此處を貸して貰いたいのだ 老婆ハ

西 遊 記

い〜お遣入んなさいまし 三藏、サーン、痛い〜 悟空、老婆
 家に何か薬はないか、寶丹か何かないか持つてた薬は皆な呑ん
 で仕舞つたんで、師匠様が腹が痛いど仰有るのだが…… 老婆
 ア、さうでございませうか、ヤレ〜 能く入来しつて下さいまし
 た 悟空、能く来たところぢやね〜、腹が痛ると云ふのだ、此老婆
 何うかして居るんだ云ふ中に奥からゾロ〜 出て来たのは何
 れも十七八或は二十、二十四五位の女か十人ばかり出て来た四
 人の様子を見ると名々喜こんで頻りに前に廻り後に廻りまし
 て、三藏、悟空等の顔を見ては笑して居りませう様子 八戒、オ、痛
 い〜胸を押へて居た八戒は女を見たもんだから少しく目を
 細くして 八戒、ア、美しい女だぞ 悟空、馬鹿野郎 八戒、痛いよ
 オ、痛い段々腹が脹れて来た 悟空、腹を吐きやがれ 八戒、腹
 ぢやね〜、胸が脹つて来た 三藏、ア、痛え〜 悟空、老婆何う

西 遊 記

か何か薬はないかな、此の通り師匠様が来るしんで居るが……
 老婆、ハイ生憎でございませう、お薬は持つて居りませんか、貴所方
 何うかなさいましたか 悟空、此先に流船があるな 老婆、ハイ
 ございませう 悟空、あの川は何と云ふ川だ 老婆、あれは子母河
 と申しませう 悟空、ハ、ア子母河……あの所に師匠様も此男も
 水を飲んだけのみとで別段に召上つたものに食合せの悪い
 ものもあいが陽氣にでも中つて居ると見えて大層お苦しみを
 さる 老婆、何でございませうか、あの河の水を召上りましたので
 …… 悟空、然うださうで 老婆、ソレならもう分つて居ります
 決して御心配はございません 悟空、ア、然うか毒水ではない
 か 老婆、エ、毒水と云ふものではございません、結構な水でござい
 ませ、ソレで分りました、只お腹が痛いど仰有るから何うしたこ
 とかと思ひましたら、あの水を召上つて腹の痛むのは結構でござ

西

遊

記

さいいます、お二人共に懐妊をなまつたに相違ふいません 悟空
 元懐旨つちやア往けねへ、水を飲んだつてへことよ 老婆、ハイ
 水をお上りあさいましたから懐妊を致します、もう子供衆が出
 来たのでございますよ 悟空、老婆、懐妊を致します、もう子供衆が出
 子供が出来ぬ奴があるか 老婆、貴所は手前の申すことを聞か
 と思召そでございませうが決して欺りを申しません譯ではござ
 いません 悟空、フーン 老婆、實は此國は西梁の女人國でござ
 います 悟空、ハ、一老婆、何か此國は女人國か 老婆、ハイ男と
 云ふものは一人もございません 悟空、フーン男が無くつて能
 く人種が尽きないな、見れば子供あを抱いて乳を呑まして居
 る女子達があちやないか何で子供が出来ぬ 老婆、イエうれで
 ございませから其お話しを致します、此女人國は昔から男と云
 ふものは珍らしい、此國を御通りになりまする人を見まするだ

西

遊

記

けでございませから貴所方四人を見て娘共や近所の女共が此
 通り珍らしく思ひ喜こんで拜して居ります位でございませ、人
 種の盡きない譯と云ふのはもう二十歳を越えますると親類一
 家が相談の上であの子母河の水を呑みまして、ソレで直に胸が
 痛んで来るのは子供の宿りましたる証據でございませ、又二日
 経つても痛まぬのは日を重ねて參つて又呑む、もう三度呑めば
 何んかものでも懐妊をしさいと云ふものはございません、ソレ
 ゆゑ子供衆の種は盡きません矢張り日を重ねますれば生落しまを
 乳も出まされば育つゝも出来ませうやうあふとでございませ
 ん前さん方お二人は全く身重におあふすつたのでござい
 ませう三藏之を聞いて腹痛の中にホロ／＼と涙を流して 三藏、
 ア、一情無きことあり吾れ今日に至り様々に苦勞はしたが右
 様のことには陥りたるは初めて、知らざるふとくは言ひながら後

西

遊

記

の水を呑むが儘に斯様懐妊を致すと云ふのは情無きことだ」と
 御落涙をなさる、八戒飛立つて泣出した。八戒「ヤア、阿兄何う
 かして呉れ、段々腹の中でグツグツ動くやうな塩梅だ孕んだつ
 て生れる所がありやアしねへ、何處から出るだらう」悟空側へ寄
 つて「悟空何うも仕方がねへ、孕んで見れば剛腹でも破つて出
 せ、八戒冗談言つちやア往けねへ、何うかして呉れ、悟空何う
 かして呉れつたつて手前が水呑んどを飲むから往けねへ……」
 老婆「此男は孕んだのかい、老婆エ、御見受け申せば相分りま
 せ、此御師匠様の方が澤山上らぬものでございませうからさうは
 見籠つて居りませんやう、此弟子様の方は大層上つたものと見
 え、五つ六つございませう、悟空大類だ全然……」八戒「五つ六
 つあるエ、弱つたを、老婆さん何うかして呉ねへ、痛い」悟空
 苦しんだつて仕方がねへ、貴様が水を飲むから往けねへのだ

西

遊

記

三蔵「ウーン行者何うぞ汝の脚通かを以て吾が脚の痛みを助け
 て呉れ何卒左様なる淺ましきことにならんやう、悟空御師匠
 様御待ち下さい、私くしも大抵あるには困りませんけれども
 男の孕んだのは困りましたな、……老婆何うだい何かねへか
 之を下そやうなことは近所の産婆か何かに之を下して貰ひた
 いもんだが……」老婆「何う致しまして下したことが知れませ
 ど、縛られて仕舞ひます、悟空其様おやかましいいふを言はね
 へで何うかあらねへか、老婆ソレはおらんことばございませ
 ん、此向ふに見えまする山を解陽山と申しまして此解陽山の半
 腹に神泉と云ふのがあります、神の井戸でございまして其井戸
 にありまする霊水神水とも申します、是は落胎泉と名付けま
 して何んなに子供が出来ても三日経たぬ中に其霊水を飲めば痛
 みを止め、忽ち其子供を流して仕舞ひませる、随分過まつて水

西遊記

を飲み苦しむ者もございます中には子供達が知らず知らずには
四歳五歳の時に其水を飲んで懐妊致しますからさう云ふ時
には落胎泉の水を一口飲ませると忘れるやうに癒つて仕舞ひ
ます 悟空イヤソレは有難い、勿論物は隠陽かものでさう云ふ
水があれは又落胎泉のやうな再び元の如くにする水がなければ
ばあらいやだ、あの山は見た所では其様に高くもあいやうだ
を、餘程遠いかい 老婆エ、一神水のある所までは三千里餘り
ございませうか 悟空三千里や四千里あつたつて擲やアしね
へ一寸行つて来るけれども…… 老婆貴所御元談仰有いまし
て三千里の道が…… 悟空ソレは婆さん心配するを三千里位
は時計五分経たない中に行つて歸つて来 老婆へエー 悟空
其處へ行つて井戸の水を酌んで来やう 老婆何うしましてソ
レが濫りに其水を汲む譯にはありません 悟空何故あらねハ

西遊記

老婆其神水を守つて在つしやるか方がございます如意真仙と
申します大仙でございまして此か方が其水の守をして在つ
しやるで愈々其水が無ければならぬと云ふ時には村の者が大
勢参りまして其仙人へ願つて其水を仙人の御手で汲んで戴き
まを、濫りに汲ませません殊に其仙人の思召に叶いませんと申
々汲んで下さいません、濫りに汲まうと致しましては祟りを致
しましるし、仕方がございませんから名々財を集め供物を供へ
其者に納物を致しまして始めて其水を汲んで貰います、貴所
方は失禮ながら道中をして在つしやるか方澤山の金銀の御貯
へがあれは格別尋常では中々真仙と云ふか方が汲んで下さ
いますまい 老婆へエー其仙人が水の守をして居て澤山の供
物を供へると其水を快く汲んで呉れるし、一合の水を汲まうと
しても供へ物をしなれば呉れぬへ其様な懇張つた仙人があ

西

遊

記

るもんぢやねへ、俺が行つて頼んで汲んで買つて来るから何か
 入物を貸しねへ桶か何か……ナニ澤山は要らねへつたつて成
 るたけ澤山持つて来るから……御師匠様今聞きましたら此傍
 に落胎泉と云ふのがございませうで、ソレを飲めば癒ると云
 ふことでございませうから持つて参りませ。三藏ア、行者早く
 何うぞソレを持つて来て呉れ。悟空宜しうございませ。八戒
 阿兄何うぞ澤山持つて来て呉れ、段々産氣が被つて来た、ソレ
 産れるか知らん。悟空馬鹿野郎詰らないものを飲みやアがる
 からだ。八戒俺も色々あみどをしたが孕んだのは始めてだ此
 様を苦しむことばない。悟空手前なんぞは何うでも宜い、俺は
 水を持つて来ても御師匠様にばかり飲まして手前には飲ませ
 ぬへ。八戒其様おことを言はねへで後生だから頼むせ、其中に
 悟空一の器具を借受けてヒラリと雲に乗つた様子、老婆はじめ

西

遊

記

小女等は其様子を見て居ると速やかに飛行を致しませるので扱
 は容易からざる羅漢に相違ないと思つたから三藏始め一同の
 者を大切に致しませる。其儘悟空は時も移さず解陽山の半腹へ
 来るど一軒の庵があるから其内を覗いて見ると年は幾歳にか
 るか知れん白髪の老翁頻りに本を讀んで居る様子、遠くから禮
 を施みしませと老翁は振返つて孫行者を見て。仙人何者だ何
 處から参つた。悟空エ、手前は唐朝よりして此度西天竺の大
 雷音寺へ教文を取りに参り御佛を拜しに行きます。依斐三藏
 と申す者の弟子で孫行者と申します。然るに此女人國へ参
 りまして心付かませ子母河の水を飲んで師匠三藏俄かに懐妊を
 致しませるし、手前の弟徒弟も矢張懐妊を致して至極難澁を致
 せませ、願はくは大仙守られる其神水を汲んでお貰ひ申したい
 之を飲むの外に藥はないとのふと、ソレゆゑ此所まで出まし

西遊記

何卒二三合の水を取織を致したい 仙人「ア、左様かさう云ふ
 ことあら唯今水を進せる供物を持参致したか 悟空へエ買つ
 て参らうとは存じましたか此邊に商賣つて居りまを家もなし
 何う云ふ物を持参をして宜しいか分りませんし、分つた所が賄
 へが薄うございませから御氣に入りませまいが、之で後で宜し
 く供物を御賜へ下さいませすやうに……」と悟空猿口から五錢の
 白銅貨を一つ出して仙人の前へ差置いて 悟空何うか之で何
 かる上げ下さいませいまし大仙「カ、カ」と笑つて 仙人「是は何んだ
 悟空へエ何か物を買つて来やうと思つても土地不案内でござ
 いまして分りませんゆゑ是で……」 仙人「フ、フ、汝事を知らざる
 者と見ねる吾が守る此神水之を汲まんぞるのに斯様なる少
 錢を持参して如何致す 悟空「ぢやア錢が足りぬのでござい
 ますか何の位納めれば汲まして下さる 仙人「一合の神水を織

西遊記

めんとする時には千兩を差出せ 悟空「ナニ井戸の水を一合
 汲むのに千兩出せと……」ヤ、此畜生手前は怪しいぞ當り前
 の仙人ぢやねへや、仙人「おんていものは人を助けたり難儀を
 る者は助け又仇する者は之を撃つと云ふのが仙人の持前ぢや
 ねへか、ソレを預かつてる井戸の水を汲ませるのに一合汲んで
 千兩宛金を取るなんて、此懸張仙人め、飛んでもねへ奴だ、さう
 れば五錢だつてやらねへ、俺が只汲んで仕舞う、井戸があつて的
 飛があるのだ汲むのは雑作もねへ 仙人「無禮な奴だ神より預
 かる神水を汝汚さんぞるか、一滴たりとも汲ませることばな
 らん、悟空「一滴も汲ませることばならねへと、懸張仙人、狡猾仙
 人俺を誰だと思うんだ、三蔵の供をして歩く孫行者でございま
 すと云へば宜い氣になりやアがつてコレ上天に在つて一度は
 齊天大聖の官に昇り、又下る時には華果山水殿洞に在つて多く

西遊記

の部下を従へ口に呪文を唱へ劬斗雲に乗る時は一刻に十萬八千里を走る男だ 仙人「オウ汝は孫悟空あるか 悟空當り前よ老翁水を汲ませろ 汲ませなければ打捨つて置かねへぞ 叩つ殺して仕舞うからさう思ひ馬鹿仙人め 仙人「不埒の奴があるものなり 其義あらば汝懲らして呉れん」と仙人大いに怒つて傍にあつた如意を取つて打つて掛る悟空体を退つて 悟空「箠棒め汝等に其様なことをされて堪るものか サア来い」と云ふと耳の中から如意棒を取出して彼是れ八尺ばかりにして置いてピリ打つて掛つた仙人に於ては如意を取つて 仙人「此惡猿其義あらば打殺して呉れる」とあつて打合つて居たが仙人も寸々術に長けたる者と見えて俄かに風を起し雨を降らせる 悟空此時に至つて 悟空「馬鹿にしやがつて 箠棒めへ 其位のことには驚ろくのぢやねへ」悟空又之を止める術を心得て居るから忽ち

西遊記

の間は雨風が止んで仕舞う 仙人も胸中に成程神變自在の奴と聞いて居たが一通りあらん奴だと心得て打合せて居たが寸々叶はないから逃出した 悟空「さまを見やがれ馬鹿仙人め 早く汲ませやがれば宜いのに 一合千兩だなんて吐しやアがつて……」 オウ深く深へ井戸だお是は何うも師匠様が待つて在つしやるから早く汲ませければならねへ」と釣竿を下して今此水を汲まうとすると 何時の間にか仙人其所へ現はれて悟空の足を引張つた 悟空「此畜生来やがつたな何うとるか見やがれ」と向つて行くど何處かへ行つて仕舞う 汲まうとすると又足を引つ張る 悟空「チヨツ思々しいおア 水を汲まうとすると悪戯をしやがる仙人を追掛けて行つては水を汲むことが出来まいから悟空氣を揉んで 悟空「是は俺一人ぢや往けねへ」と思ひましたから其儘にして雲に乗つて歸つて来た見ると師匠も八戒もウーン

と苦しんで居る 三賢行者戻りしか早速に其水を…… 悟空
 イエまだ水が手に入りません婆さんはじめ一回の者少しの間
 に歸つて来たのを見て 老婆貴所逆も道が知ますまい 悟空
 道が知れねへのぢやねへ仙人慾張つたことを云つて一合の水
 が千兩だつて、逆も尋常ぢやア銜げねへから歸つて来た、悟淨一
 緒に行け貴様は手桶か何か擔いで行け俺が仙人と闘つて居る
 中に手前が水を汲んで仕舞へ 悟淨宜しく 一緒に行かうと
 其儘悟淨を連れて再度來つて見ると、もう慾してやつたから來
 は致すまいと心得て居る所へ大音を揚げたる孫悟空 悟空サ
 ア慾張仙人此所へ出る 仙人野郎妙なるものを連れて來た其
 義あらば……とあつて如意を廻して打つて掛ります、悟空再び
 金箍棒を取出したることにして打合つて居たが打物業では叶
 はぬいから仙人逃げる逃げる、其間に悟淨汲み始めやがつた、沙悟

淨が頻りに汲んで居る様子を見て仙人は何うも始末に往けぬ
 へ奴を引張つて來た是までと心得たるふとゆゑ身を躍らして
 手元へ寄らうと云ふ所をピシッ引擲いた、悟空の爲に打たれ
 ては遣りません、其儘にして仙人は何方ともかく逃げて行く其
 間に悟淨大きな手桶へ一杯汲んだ 悟空水を汲んだか……ソ
 レで宜い 悟淨何うも阿兄相闘らぬ強いか 悟空野郎慾張仙
 人昨つ殺そのだけども命だけ助けたいソレを持つて直ぐ立歸
 りました、其時には八戒の腹次第に脹れて稍々臨月と云ふ撫梅
 八戒泣いて居やがる、老婆始めとして一同其汲んで參つたる水
 を遠方から見ると光りを放ち、心に不思議なる水でございまそ
 何れも其水を拜しまさる位早速に之を小さる器へ汲みて師匠
 に飲ませる、三藏其水を飲むと胸の痛みも忘れたる如く、其儘に
 消々と致しました 悟空八戒には飲ませねへぞ八戒泣出して

西

遊

記

八戒阿兄後世だから一杯飲まして呉れ 悟空手前には飲ませ
 ねへから産んぢまへ 八戒元談言つちやア往けねへ産む所が
 ねへぢやねへか 悟空鼻から産め 八戒鼻から産めるものか
 泣いて願むものでございまをから水を飲ました宜い盞梅に胸
 の痛みも治まり八戒清々とした 八戒もう之に懲りて迂濶水
 は飲まねへ時に老婆始め一同の婦人は其所へ來りましたる
 とにして 老婆願はくは長老此水を吾々共へ施みして下さる
 んどは出來ますまいか云ふから三藏圓より斯様なる水を持
 つて歩く必要も無いから 三藏イヤ汝等が入用ならば暫らく
 此所を借りたる禮として之を差置くであらう何うも女子共大
 きに喜こんで小さな器を持參を致して名々争ふて其水を受
 け是は神水なりとあつて何れも家毎に大切に致し置きまそ
 扱 悟空に於ては斯様ある所へ長居を致すと又何様あることが

西

遊

記

出來そるかも知れんどありまして、師匠を白馬へ乗せ、悟空は
 め三人御供を致して此所を出立を致します、

第六席

四人は唯西を急ぐ身分でございまそ、老婆の家を立出でまして
 一日中は別段にお話しくなく、翌日の唯今で申す一時の頃ほひ
 にありまして一の都會へ這入つた所が往來の老若男子と云ふ
 ものを一人も見ず、流石に西梁の女國に相違ございません、老い
 たるも若きも男子四人が打通る様子を見て何れも面白氣に之
 を眺め中には指差をして笑うものなどがある、三藏迷藏を遊ば
 したか何うも通り掛りし道是非に及ばん、悟淨悟空の二人は誠
 に若々しく心得て居る八戒喜こんで妙な面をするものでござ
 いますから愈々女子共は八戒を見ては笑つて居る、八戒の丫簡
 ぢやア俺が斯うやつて通るもんだから女が皆な俺の方ばつか

西遊記

り見て居る切て斯う云ふ所へ一年も逗留をしたいのだと助
 倍野郎ソロ／＼考へ出した、一の關門かあります、其所へ來り
 すると官吏と云ふのも何れも婦人でございます、役人御身等
 暫時お止まりなさい、三藏馬を下りまして禮を施こしますると
 先方も同じく禮を厚く致して、役人何方へ御通りになりませ
 る、三藏されば拙僧は唐朝より西天竺まで罷越す依獎三藏と
 申せる者、連れられたるは徒弟共三人速やかに當都を御通し下し置
 かれなば辱じけなく存せる、役人左様でございまするか、是上
 り先に嚴重ある關門がございまして、濫りに御通し申する譯に
 ありませせん、一應國王へ對し奏聞を遂げ往來手形が無うては通
 行の儀は許されませせん、三藏其義に付いて官吏あらば其人に
 就き往來の手形を申受けばやと心得て參りました者、決して慥
 しき者には候はず、何卒往來手形を下し置かれなば千万有難

西遊記

みどに存じませ、役人暫時此所にお扣えさるやうに……
 名々を其所へ待たして置いて、其身に於ては直に王室へ通りま
 して右の由を精しく女王へ對して奏聞を致しますると、女王之
 を聞いて、女王一ト先目通りを差許そでわらう世の中に男子
 と云ふ者があるとのみどは聞いて居るが未だ見たことがあ
 此所に四人の者を案内を致するやうに其上にて心安く手形を
 遣はすべしとの仰せ、官吏は立歸り右の次第を三藏へ告げる三
 藏大きに喜みんで何處の國へ參ると雖も濫りに國王へ謁見
 をするなせと云ふことばございませぬ何れも喜こんで同道を
 致し案内に連れまして王室へ通りました所が實に珠玉を東
 花を飾り何に例へん方もなく美麗なるみどでございませ、先づ
 案内の席へ通りまして四人の者は其所に扣へ相待つて居りま
 する、と女官入替り立替り物陰より致して此様子を見る女王に

西 遊 記

も先づ御目通りを後に致して先に如何なるものであるかと思召しまして余所ながら四人の様子を見たり取分け中央に扣えて居ります三歳年とても左まで御取り遊ばしたと云ふではございませぬし殊に何うも天然の美男子に好男子でございませ付いて居る者は何れも不思議な顔色をして居る女王暫時の間其様子を見て御覧じあさいますと御心を動かしたるものと見えまして三歳の様子に見惚れてお在遊はした官吏を其所へ御招きになつた官吏何事と心得て女王の御側へ罷出でました女王吾れ先刻より彼の三歳と云ふ唐僧を見るに實に氣高くして殊に相貌美あり吾國開闢以來男子と云ふものを見ることお從がつて今日まで陰陽の道を知らせ今より唐僧を吾が婿と爲して國王と定め吾は皇后とあつて長く此國の榮ねを見んことを望む其方唐僧に告げて早速婚禮の式を擧げ此國の隆盛を

西 遊 記

計るべしと云ふ仰せ酷い國王がわれはあつたもの見たばかりで婿にして自分は皇后になつて此國を三歳に譲ると云ふのだ官吏之を聞いて役人委細畏まり奉まつりました右の由を申入れましたからば定めし喜みふみとでございませうと退つた四人の者が待つて居る所へ官吏罷越して役人扱唐僧唯今我向いての御目通り仰付けられます就いて女王御身の姿を余所おがら御覽に相成つて此國は開闢以來男と云ふものを見たりおがない婚禮の式と云ふ條是は書物にこそあれ實地に行つた者があつて唯今より此國の様子を見給ふて悉く懸想の情をお述べ遊ばして唯今より此國の様子を見給ふて悉く懸想の情をお述べ遊成つて永く吾國の繁昌を見んと云ふの仰せ……之を聞いた三藏驚ろいた三藏是は何うも怪しからん御覽の通り手前は頂黒衣の姿佛へ仕へまを若でコレが唯今になりまして還俗

を致して…… 役人「イヤうれば往かん、ソレを唐僧御承知がな
くば往來手形は愚か勅命として四人の者其事に應ぜざる節は
死刑に行ふべしと云ふ即ち仰せがあつた此方に聞いて居た八
戒悟淨驚ろいた 八戒大變々々、オイ悟淨師匠様は是から還俗
をそる 悟淨還俗をするニ 八戒、ウン…… 悟淨、錯の端でも
賣るかい 八戒其様おものを賣りやアしさい、ソレを承知しな
ければ四人おがら死刑だつてことだ 悟淨、死刑…… ソレは大
變おことが出来た、けれども八戒の前だが死刑だからつて刑極
へ臨んでも吾々三人は空を飛ぶの術があるから通れることが出
ぬ氣の毒おのは師匠様肉体で在つしやるから通れることが出
來さいと云つて師匠様を連れて逃げることも出来ねへ 八戒
何しろ助倍お國へ來たな俺でも見染れば宜いの…… 悟淨
誰が手前を見染めるものがあるか 八戒、俺なら我慢をすらア

悟淨「先方で我慢をしやアしね」三藏は何うして難談どころで
はない、色を變へて 三藏「是は嚴しき仰せを承たまはります
ので先度も申します通り手前は唐朝を立出で帝の勅命に依
つて西天竺大雷音寺へ教文を取りに参りませる者、ソレが此場
に至る右様のことに相成りますれば此上もなき手前の粗忽落
度にも相成りますること、思召しは辱しけなうござるが 役人「
イヤそれは唐僧往かん之を経つて御承引なくば是非に及ばん
から死刑に行ふの外道はかい國王の仰せを背いたら相濟むま
い、ソレよりは斯うなされては何うだ、此三人の變お顔をして居
るお弟子に…… 八戒「一寸伺ひませが只お弟子だけにしてお
貫ひ申したい、變お顔とは…… 悟淨「黙つてろ 役人「此三人の
弟子等に申付けて西天竺へお遣はしになり教文を取つて唐朝
へ歸つて帝へソレを捧げたら仔細もござるまい、女王の御せに

は斯う云ふ變擬も三人には別段に御用はあいのので、唐僧一人
 留めて置きたいと云ふの仰せである。三藏へ「エー仰せには
 さいまするが野僧は甚だ迷惑を致しまする、固より致して五
 の中の邪淫戒と申して是は……」役人「イヤソレを強情を張
 と唐僧一人でない、名々一命があい。三藏、縦令此場に至り一
 を取られましても何しにソレに従つて還俗を致し夫婦の交
 を致さざといふことは思ひも依りませんこと、命を此場に
 召されましてもソレまで……」管吏に於ても大きに持餘した、時
 に悟空傍らに扣えてありました。悟空「エ、御役人へ申上げ
 まそが手前の師匠は物を言ふふどが至つて下手でございます
 心にあつてもソレを即答をしあがつたり、右と云ふふどを左と
 云ふやうなふどが往々ございまそる、何れも其女王を嫌うの何の
 と云ふ譯ではございませぬ、暫時御任せ下さいませすやう、手前師

匠へ説いて其國の王に相成ると言へば此上もない喜こびで
 さいますから此義は行ひまするやう致します、斯様申そど如何
 でございませすが手前が斯うなさいと申しますればソレに應じ
 て呉れる人でございませすから、國王にあると云ふのは御上も
 いこと仰有いまそ通り西天竺へ参るには我々三人参つても
 文を取つて歸るだけのふとでございませ、婿にあらんと云ふふ
 は極く結構でさうなりませるやう取計らひませから……」と受
 合ひまする様子に三藏驚ろいて悟空の顔とハツタと睨んだが
 悟空平氣だ、八戒悟空の二人は袖を扣へたることで、兩人「ア
 阿兄、詰らないものと、言つちやア往けあい、何を言ふんだ」と小聲
 で言つたが悟空聞かぬ、舉動をして居る。悟空善は急げと申
 しませるから早速唯今より婚禮の式を行ひまして小ども早く
 物を纏めました方が宜しうございませう。役人「是は何うも此

西遊記

の申す所至極活斷で面白、宜しいか 悟空、宜しうござい
まそ、明日を待たぬ今此處で御婚禮と云ふことになりまして
差支ございませぬ精進物を食べて五戒たどか十戒たどか其様
あことをして居るよりは時々に聞いて居りませぬが大層美人だ
さうで、ソレと手前共の師匠が此通り美貌でございませぬから夫
婦にありました間に子供が出来ませぬれば之に越したことは
ございませぬ、至極結構でございませぬ先づか目出度う存じませぬ
更大きに喜こんで 役人然らば其通り申入れやうから……」と
退散を致さる由を見て居りました三藏 三藏悪哉吾が言葉
破り、汝如何あれば右様なことを申せ、縦令死に至ればどて吾れ
佛の道を守り其教へを破るべきか、死刑に相成ると御せも悪俗
は致さぬ 悟空御師匠様馬匹あことを仰有つやア往けませ
ん貴僧が其様あことを言ッちやア仕方ございませぬ此國へ

西遊記

来て居れば此國の法に習くことは出来ぬやございませぬ
か殺せと云ふことにあつたら何うなさいませぬ、私くしや此處
に居りまを悟淨八戒あはソレは又逃げる法がわりませぬから
難作はございませぬが貴僧は失態あから幾ら懲罰で在つしや
いまして、固より肉體でございませぬから何うをすること出
来ませぬ、ソレより一且承知をなさい 三藏承知を致せば借
老同穴の契り…… 悟空、イヤうれば其處まで往かぬ中に
色々手段がございませぬ私くしが急いでと云ふものは是が五日
も六日も経つと其中に餘り暇になりませぬ、斯う仰有つて下さ
い思召しは有難いから國王にあらう、就いては此三人は一日
も早く西天竺へ遣はまさればならんから何うぞ三人へ手形
を書いて逃やかに國門を出ることを許して置いたいと仰有れ
ば直ぐに書いて呉れます 三藏、アーン 悟空で式場へお出な

西遊記

さる枕を交さなければ宜いぢやございませんか、婚禮の盃を
 ると云ふ場に臨んで私くし共三人は左様あらお暇を致しませ
 斯う申上げるから長く供をして来たものだから然らば廓外
 で見送つてやらうと貴僧が仰有る、私くし共三人は御師匠様
 見送つて戴いては濟みません、何うか此處でお別れを致しま
 るからと斯う言ふ貴僧が強つて廓外まで送つて出ると仰有
 往來手形が三人でございませ先方ぢやさうあつて居るから
 心をして居ます安んずるから付いて来る者があゝ来た所が家
 来の三十人や五十人來るのは何でもございません貴僧は悠々
 と申へでも馬へでも乗つて貴僧の馬を私くしに下さる私くし
 は宜しうございませんが是が先き馬がかければ貴僧が往けま
 せん、扱行者其方には此馬をやるが私くしは有難う存じますと
 之へ乗つて行つて悟淨と八戒を連れて戶外へ出る貴僧が送つ

西遊記

て下さる關門を出る時に私くし共は手形があり貴僧は此國の
 王様でございませから關門を出るにも手形も何にも要らない
 關門さへ出て仕舞へば何でもあゝ貴僧をお連れ申して悟淨と
 八戒と後押をして参ります三藏馬に後押と云ふのがあるか
 悟空馬が歩かあかつたら體で引ばたいて逃げて仕舞へば宜し
 うございません三藏さう往くかあ悟空貴僧が思だど仰有れ
 ば切られませ、私くしは貴僧の徳を知つて、婿となるの還俗を
 するのと云ふ思召しは命を捨て、も婿にならんと云ふの
 は貴僧の御氣質さうしかければ危いではムいませんか三藏
 然らば其方の意に任してさう云ふことに致さう、何うか私を連
 れて逃げて呉れ悟空エ、宜しうございませ、……宜いかい悟
 淨八戒さう事が極つて城門の外へ出て、ソレから師匠様を馬へ
 乗つけて三人で馬を引ばたいて行くのだ、兩人心得たさう云

西遊記

ふことになければ阿兄が婚禮を易々と承知をよる譯が亦から
 うと思つた 悟空時に二人へ言つてくが是からさう事が極つ
 て愈々御馳走をよると云ふことにあると飢度美味へも酒を
 山出をせよ 八戒ソイツは有難へあ斯う云ふ時だから腹一杯食
 つて置かうまだ出ねへか 悟空断はつて置くが八戒手前は女
 ばかりの所だからデレ／＼するな 八戒大丈夫だつてへこと
 よ、酒を飲んだつて確かだよ 悟空手前は確かぢやアねへや耳
 をダタリと下げて涎を流して女を見る時の面はねへ 八戒ソ
 レは少とは遊うよ其様に酷いみどはねへ 悟空では官吏を此
 所へ招いで快く御承引をさい、弟子共がソレまで言ふから斯う
 と……其處が大事を所でございませ 三蔵委細承知を致して
 漸うのことで三蔵御安心をなすつた、手を拍つて官吏を招き出
 する、官吏再び其所へ出て参りまして 役人何か御用で……

西遊記

三蔵切先は即答を致さず誠に相濟まんこと、段々弟子共が申
 すにはソレ程にまで思召しあるものを和を拂つて當國を立退
 く云ふのは如何で西天竺へは吾々三人が参るから心安く當
 國に留まり幸福を得給へどのことゆゑ不肖ながら唯今より式
 場へ参つて婚禮の式を畢げ早速に國王の披掛を致したく存中
 る 役人ソレは早や何よりの喜こび女王へ申上げたる節は定
 めし御満足なさるでござらう 三蔵付いてはさう云ふこと
 れは急ぎ西天竺まで此三人を遣はさねばならん補償は當所へ
 留まると相定まらるも三名の者へ往來手形を下し置かれるやう
 願ひたい 役人ソレは無論のこと暫時何うか御猶取を願いた
 いと再び其所へ待たして置いて右の返答を致したるから女王
 大きに喜みんで俄かに婚禮の式を擧げると云ふみどでござい
 ました宮殿の方へ對して種々の飾り付を致し國王のことで

記 遊 西

さいますから速かに何も彼も驚きましたものを見て改たぬ
て是より致して其式場へ案内をまし、大勢の官吏皆な婦人で
さいまして東西に居流れて居ります、其席の正面の所へ對して
國王の椅子を設けてある迷宮ながら依斐三藏は其正面の椅子
に坐しました、然る所へ立出でましたる國王に於ても花を飾り
珠玉の冠に目を驚ろかそばかりでございませ、所が其前の所
へ供へてございませ、酒肴と云ふものは何うも見たこともない
やうな料理大層あるものでございませ、其中に女官此所へ出
で申して愈々盃をすると云ふことになりました、二人の女官と
見えて大層を發したることにして茲に祝ひ喜みびませる、日本
なら謡曲でも唄うと云ふのでございませ、何せ西梁女國の
みとでございませ、からお婆さん大層を揚げてカンノノ、ヤ
エノレスか何かやつたんで、是は彼國の高砂や見たやうなも

記 遊 西

ので其中に盃を既に開いて三藏へ之を進めやうとせると三藏
此所だ、縦令枕を交さないでも、モウ三三九度の盃をして仕舞う
と大さに醫ひに漏れませやうなことでございませ、から三藏
扱女王へ申入れる斯る貧僧を思召し厚く斯ばかりのことに相
成つたるは喜みび限りなく、今盃を爲さん前に一言の頼みがあ
るが聞いて下さるか、女王ニッコリ打笑ひましたることにして
女王、吾夫の頼みとあるは何事あるか、此上共に万事は君の心に
任せ侍りませ、いとゆゑ念無う仰せ下し置かれたい、三藏餘の
義ではない、唯今官吏へ申入れたる通り彼等三人は少しも早く
西方へ遣はさねば相成らん者何うも氣懸りで相成らんから三
人の者へ往來手形を遣はして見る前に出立をさせて貰ひたい
女王大層喜みんで、女王暫時此所へ留置き、廻應をも爲すべき
の心得であつたが、君先を急がれるとあるからば速かに三人の

西 遊 記

者出立の儀を許しませうと直ぐに書記官へ申付けまして往來
 の手形三人だけございませぬと認めさせて自ら玉印を捺して三
 藏へ渡り三藏ノレを見受けたが之はへあれば關門を越すは難
 作も無い、悟空を招いで三藏如何に行者其方へ之を遣はす吾
 が志しを西天竺へ罷越したる能く如來へ申上げ尙ほ大切なる
 放文を其方等三人で預かつて唐朝へ立歸る砌は一度此所へ立
 寄りまするやう悟空殿にはや不思議な事とて恐れ入りまし
 てございませぬと云ふことございませぬれば手前共三人は十
 里も早く行かなければなりませぬ日本なら一里も早くと云ふ
 のだが彼國では六町一里でございませぬから十里が早やと云ふ
 悟空殿に此上も無事御大體の唯今でございませぬと出立を致すと
 云ふことが御婚儀の儀になりませぬのは甚だ不縁起で立歸る
 といふことは思召葉たど云ふこととございませぬから御座の御

欠

MISSING

西遊記

緊箍呪を唱へるとか箍棒めエ勝手にしやがれ、もう此様な所に
 は居ねへや 三藏又しても悪口を申そか 悟空悪口でも何で
 も言はア、行けるから行つて見ろい、俺が付いて居るから此處ま
 で来たんだ其様なことを言いたかねへや、言いたかねへが餘り
 分らねへや、破門をすりやア丁度宜いや手前の側に居るから緊
 箍呪を唱へられて頭が痛ゑのだ側に居なければ仔細はねへや
 様を見やがれ此カン坊主め八戒悟浄の二人が 兩人同兄
 其様にお前…… 悟空同兄も獲もあるものか手前達が供をし
 て行けば丁度宜いや三人ながら食はれて仕舞へ如意棒を隠め
 るとブッンと行つて仕舞つた、八戒と云ふ奴が馬鹿の癖にし
 て賊に悟空と仲が悪い 八戒師匠様宜しうございませぬ、ナニ悟
 空一人が通力があるのぢやございませぬ、私くしでも悟浄でも
 付いて居ますから…… 師匠様に叱られたら一度は謝罪するのが

西

遊

記

本當でございませぬ、ソレを御座らぬいで腹を立つてドン／＼舞
つて仕舞うやうな奴でございませぬ、宜しうございませぬ、私しが
供を致しましから、ア悟浄 悟浄待らねへよ、だれれどもコイ
ッは師匠様何でございませぬよ、悟浄が居あいと是から西天竺
でお出になるのは餘程むづかしうございませぬ、八戒何故か前
は其様に気が弱いのだよ、俺が付いて居るぢやねへか 悟浄
ら八戒お前が付いて居たつて往けねへお前が付いて居りやア
尙ほ危い毎でもやり損なつちやア悟浄阿兄に助けて貰うぢや
ねへか 八戒師匠様の氣に入らねへ者を連れて行つたつて仕
様がねへ氣を付けて西天竺まで行けば宜いのだよ三蔵も怒りが
止まあいかから 三蔵尤もだ、悟浄一人で西天竺へ参ると云ふ
次第であら固より吾れ唐土を立出でる時より一命は抛つて居
るのである、ソレでは参らうと云ふと二人を連れて西の方へお

西

遊

記

山になつた、扱お話し別れて悟浄はドン／＼ 華果山水
際洞へ歸るつりて途中まで来たが當人も考へた 悟浄ア、
詰らねへな飛んだみどをした、師匠様も腹が立つたもんだから
ミ／＼ 叱言を言ふし、此方も此の居所が悪かつたから謝罪り
もしねへで遊つたので勘當された俺の方は宜い水簾洞へ歸つ
て子分を集めて居りやア不自由はねへ俺は宜いければも師匠
様が可哀想だ、天狗を言ふやうなだけれども俺が付いて居あけれ
ば悟浄や八戒ぢやア迎も西天竺までは行けねへ師匠思ひの男
でございませぬから 悟浄何しろ飛んだみどをした水簾洞へ歸
つて家の奴等に又親分が失策つて歸つて来たと言はれるのも
思だしと言つて今から後を逐掛けて行つて、誠に悪うございま
したと言つた所が腹を立つてゐるから何と仰有るか知れぬ、悟浄
はさうでもないが八戒の奴は俺を邪魔にして彼奴が色々なこ

西

遊

記

とを吐しやアがる、……さうく、是は一ツ南海の普陀洛山へ行
つて觀音様へお願ひ申して詫言をして貰はう、ソレが一番だ謝
罪する時に早く謝罪つて仕舞つた方が宜いと考へたものだから
遊を變へて南海の普陀洛山へ參つて雲を下りましたが、悟空
賊に御無沙汰を致しました、菩薩、オウ齋天大聖か何うして今
時分參つた、悟空、何うも相濟まぬことをしましたので、又失
策りましたした、菩薩、又失策つたか何うも三藏は徳僧に相違ない
けれど、も賊にまた年が行かんから聊かのことゝを怒るやうあこ
どがある何で失策つた、悟空、今度は斯うく、斯う云ふ譯で女
人國へ遣入つて酷い目に遭つて師匠様と八戒が孕んで、ソイツ
を出たかと思ふと今度は女王と云ふのが師匠様を見染めて強
つて婿にせると云ふので其處を海うのこゝで引張り出したん
で、ソレから途中で怪物を退治たり何かしたんでございませうが

西

遊

記

其處は宜かつたんですが泥棒が出やがつてソレを殺しちやア
あらぬへと云ふのを懸に障つたものだから山賊を殺したんで
スルと腹を立つて無闇に人間を殺すのは往けねへと云ふので
其處で謝罪りやア宜かつたのでございませうか謝罪らなかつた
ものでございませうから到頭勘當をするよと云ふので私も瀕に障
つたから悪口を言つて出たのでございませうが是から水隠洞へ
歸つた所で諦りません、又段々考へて見ると迎も悟淨や八戒が
付いてつた分には西天竺まで行けませんと言つて今私くしが
勘忍してお呉んなさいと言て行く譯にも往かず思案に餘つて
ソレから此方へ來ましたのでございませう、何うか貴佛から一つ
師匠へ詫言をして下さいまし、是から私くしも心を改ためて餘り
師匠様に逆らはないやうに致しますから……菩薩、悟空、其方
は其志ざしが貴とら、一旦の怒りはありと雖も再び悪いこと

西

遊

記

をしたと云ふ幽罪つて尙ほ三藏を案じ此上共に供をしたいと云ふのは感必だ併し余が別段に雲を起して三藏の所へ参らんでも宜い今に三藏の方から迎ひが来るから四五日此處に待つて居る 悟空左様でございませすか師匠の方から迎ひが来ますか 菩薩吾れ段々天地の様子を考へるに何うしても迎ひが来るやうになつて居るからマア遊んで居るが宜い 悟空左様でございませすか何うも有難う存じませすやア御迷惑ながら當分御置きませつて下さい 菩薩長いみとでさい四五日経つたら迎ひが来て再び三藏の供が出来やうから 悟空貴佛が仰有るみとに間違はございませせんから其間御厄介ではございませすが形たり起きたりして酒の些少も飲んで花牌でも引いて…… 菩薩馬鹿を言へ其様おことをしては往けさい観世音は能く先の分るお方でございませすから齊天大聖をお手許へ留めてお遊

西

遊

記

きなとつた扱三藏は悟空に暇を遣はして八戒悟淨の二人が供をして行つた宜い盃梅にさしたる山もあし道も大きに平垣でございませるから苦も無くおなとつたが扱食事に乏しい所へ来た 三藏八戒何うも食物がないな 八戒エ、朝御飯をお上んあつたさりでございませ今二時でございませす、嘘ぞ御空暇でございませう 三藏其方何方かへ参つて齋飯を求めて来ては呉れまいか 八戒宜しうございませ私くしが行つて参りませ、悟淨師匠様の側に居て番をして居なければ往けねへせ 悟淨俺は番をして居るが八戒又寝ちやア往けねへぞ手前は何んな用があつても寐て仕御う 八戒馬鹿を云へもう寝るものか悟空が居たので此方も寐に障るから逆らたやうなもの 悟空が居なければ俺がお供をして行く一番役者だからもう其様なことはしねへ 悟淨宜い 八戒宜いとも行つて來

西

遊

記

るから……雲を起して八戒行つ 任舞う、サア待てと暮せと歸
つて来い、追々暁は空つて来るし 三藏「悟浄、八戒は何うした
らう 悟浄「大層遅うございませす、又事に依つたら途中で寝てで
も居りませるか 三藏「困つた奴だな 悟浄「今とあつて見ると
何でございませすか、齊天大聖が居りませんと此様か時に困りま
す私くしが何を言ふたつて中々八戒が聞きません 三藏「併し
一旦眼を出した者を唯今に至り此所へ招くと云ふふにもあ
らね、又悟空も餘り何うも慢じて居る其方水ありとも汲んで来
て貰ひたい序でに八戒を尋ねて途中に寝てでも居つたら當人
を引起して…… 悟浄「宜しうございませ、ソレぢやア私くしが
参りまして冷水を汲んで参るやに致しまして熊手を担いで沙
悟浄は八戒を尋ねながら良い水を汲んで来やうと思ひませすか
ら鉄鉢を持って出て行つた只一人松の幹の所へ馬を繋いで御

西

遊

記

自分其側へ付んで八戒の歸り悟浄の歸りを待つて居る所へ
プウーッとい一陣の風拂はと思つて御覽あると忽然と其所へ
現はれたのは孫悟空鉄鉢へ水を汲んだ奴を持って来て 悟浄
エー御師匠様でございませすか、何うも此間は誠に相濟みません
此の居所が悪かつたと思ひ見えて貴僧の仰有つたあとを私くしが
悪く聞いてツイ失禮を致しました、段々考へて見ませと逆も西
天竺までお出なさるのに悟浄や八戒が供をした位では行けま
せん、是からまだ 化物の多い所へ向ふのでございませすから
私くしがお供をして行きたいと斯う存じますので、付いては水
を汲んで来ました之を召上りませすやう差出したのを御覽じて
三藏「未だ怒り止ませるものと見えてハッど鉄鉢を其所へ投げ
て水は忽ち四方へ溢れる、悟空呆れて顔を見て居た 三藏「何
をする、破門をすれば他人ではないか、他人の其方が如何なる物

西

遊

記

を持參して吾を尋ねるるか計られん、重ねて其方とは口を聞か
 ん、何方へでも行け、悟空何を………儘にしやがれ、籠棒奴一旦は
 別れたければ、悪かつたと思つたから歸つて来てやつたんだ
 水が欲しいと云ふから水を持つて来てやつたんだ何をしやが
 る間、抜め、カン、坊主、青坊主………三藏、已れ此三藏へ對し悪
 口を申すか、師へ對して………悟空、破門をしたと云ふぢやねへ
 か、破門をしたら、匠師でも何でもねへ、折角親切に汲んで来てや
 つた水を、溢しやアがつて馬鹿坊主めと言ひながら足を掲げて
 蹴た、已れッ、と仰つたが、腕前の点に至つたら、叶ひません、如意
 棒を取出したる孫悟空、忽ちちの間の之を八尺ばかりに延ばして
 プウーン、風を切つたることで、ビョーリ肩の所を打たれたるこ
 とゆゑ、何にかは、以つて堪りませう、固より、大力の悟空に打たれ
 三藏、已のれ師へ對して………と云ふのも聞かき、續け打ちにビョ

西

遊

記

リ、十四五振と云ふもの打込んだから堪りません、忽ち三
 藏其の儘にウーンと云ふと、氣絶をした、傍へにありました、荷物
 ソレを一つに集めたることにして、雲へ乗ると、プウッ、と悟空
 行つて仕舞つた、懼れむべし、三藏此の所ろに於いて、氣絶を致し
 ました
 悟浄、オイ居眠をして居るのは、八戒ぢやねへ、か何をして居るん
 だ、歩きながら居眠をする奴があるか、八戒、眠いから仕方ね
 へ、家も何もありません、アしねへ、漸う一軒見付けて、結飯を拵らへて
 貰つた、悟空、結飯を持つて居眠りをして居る馬鹿があるか
 八戒、居眠ぢやねへ、變な心持ちがあるから、時々目を眠つて歩く
 のだ、悟浄、餘り遅いから、師匠様か見て来て、仰有るのだ、八戒
 何だい、持つてるのは………悟浄、是は水だ、師匠様が水が飲みてへ
 と仰有るから持つて来たのだ、サア行かう、二人は鉢に水を

八八
 入れ一人は結飯を持って以前の所へ来て見ると松の傍らに馬
 が驚いであるが師匠様が見えまい。八戒何處かへ行つちまつ
 たせ。悟淨だから言はねへ。……居る。……彼處に居る見ると以前の所か
 ら彼是れ三町ばかり離れて居ます所に倒れてお在なざる様
 子。兩人、アア大變だ、師匠様は氣絶して居なざる。二人で介抱
 を致しませり、持つて参つた水を吹掛け。悟淨師匠様ア。八戒
 師匠様アと呼んだ。三藏ウーン……ウーン。八戒お氣が付さ
 ましたか何うしたのでございませう、八戒でございませう。悟淨悟
 淨でございませう、師匠様ア悟淨八戒が大きな聲で呼んだ。八戒
 お氣が付きましたか、サア水を召上かれ、……何んか怪物が出た
 のでございませう。三藏唯今此所へ現はれたのは怪怪ではない
 ア、惜しい奴は齊天大聖だ。八戒へエー阿兄が何うしたんで

百九
 さいませう。三藏唯今此所へ現はれた。八戒歸つて來ましたか
 ら。三藏吾へ甘言を用いて水などを汲んで参つたが彼が持参
 いたした水は事に依つたら悪水ではないかと思つたから依つ
 て飲まんで其所へ投げた、スカと如意棒を以て吾を打つこと懸
 だしく、遂に此所へ氣絶を致した。八戒エ、師匠様を撲ちまし
 たか、本當に憎い奴だ、全くでございませうか。三藏嘘は言はん
 必らず偽言は申さん。八戒悟淨何うだ、悟空が來て師匠様を殺
 したつてんだ、外のことなら宜いけれども縦令破門をされても
 師匠様ソレを撲殺をなんて飛んでもねへ奴だ、おまけに荷物
 ねへ、師匠様荷物は何うしたんで。三藏悟空殘らぬ荷物を盗ん
 で其儘に勦斗雲に乗つて退散をした。八戒ウーン、酷いあどを
 するぜ、サア悟淨是からは手前と俺が、ッカリしおければ往け
 ねへ飛んでもねへあどをする、打締つて置けねへ是から一番行

つて継令叶はねへまでも悟空を叩つ殺して師匠様の敵討を
 なければ往けねへ蘇生をしあそつたから宜いやうなもの、
 ウ少し打捨づて置けばソレつきりた俺が師匠様の番をして居
 るから手前行つてやつて来い 悟淨待ちねへ八戒何も他に言
 付けねへつたつて宜い 八戒ソレは俺が行つても宜いがマア
 手前が先へ行つてやつて来い俺は師匠様の番をして居るから
 …… 悟淨何も手前が言付けなくつたつて宜い俺が番をして
 居やう 八戒チョッ俺が番をして居るんだつてへ事よ 悟淨
 旨く言つてるぜ八戒對手が阿兄だから叶はねへと思つて……
 八戒ナニ先方に何んな術があつたつて此方も變化の術を心得
 て居るから大聖だつて怖いことかねへが其處だ 悟淨何處だ
 八戒俺は眼が空つてるから手前行つて来いと云ふのだ 三藏
 悟淨々々八戒は悟空に逢ふては一言もまい男だ此仇討を致し

のは其方に限る、參つて早々彼を退治致して立歸るか、若し退治
 するもどがあらんとしたら是非に及ばんから彼の手許にある
 荷物の中には様々の用品が通入つて居る殊に大明なる袈裟法
 衣是は固より吾が一つの寶物にして失してならざるものであ
 るから荷物だけにても其方取戻して參るやう致せ 悟淨宜し
 うございませす、承知いたしました、ぢやア是から行つて一番及ば
 ずながらやつ付けませ……ぢやア何だせ八戒番をして居る
 八戒番をして居るよ、俺が居れば大丈夫だ 悟淨毎でも尻へば
 かり廻りやアがる、沙悟淨熊手を担いで此所を立出でたが考へ
 た待てよ俺が何んかことをして打付かつても齋天大聖には時
 はねへ、マゴくして殺されて仕舞つては仕様がねへ是は行つ
 て頼まう、頼んでさうして品を返して貰はう斯うなつちやア阿
 兄も聞かぬへ氣象だから何うぞ是から供をして呉れつたつて

決して承知して呉れる氣遣ひはねへから頼んで品物だけ返して貰へばソレで宜い返さねへと言つたら又やり方がある沙悟淨と云ふ男は正直な男でございませから水龍洞へ來つて様子を見るも大勢の小猿を對手にして悟空酒を飲んで居る様子だ其前へ雲から降りて悟淨阿兄其處に居たかい酒を飲んで居た悟空振返つたが悟空ナニ沙悟淨ぢやねへか手前に阿兄なれと細みに來たのか悟淨さうぢやねへさう何うも阿兄怒つちやア往けねへ外のことぢやアねへが阿兄が持つて來た荷物だあの中には大切な袈裟や法衣が道入つてゐるし外に書物がある何うしても西天竺へ行くとはいはあの荷物があければあらねへのだ何うか荷物を返して貰ひてへものだが……悟空往けね

め餘り分らねへや此方も一旦悪いと思ふから行つたんだア、悟空が能く來て呉れた私も腹が立つた儘に其方を破門をしたが何うか一緒に持つて呉れた私と云へば供をして行くんだソレを俺が待つてつた水に毒が道入つてゐるなどと吐すから俺も怒つて打擲いてやつた殺そのは可哀想だから半殺しにしてやつたが思を吹返したか悟淨さう言へばさうだけどもソレぢやア阿兄済まねへせ悟空何が済まねへ悟淨何がつたつて五行山の下に押へられて出ることが出來ねへのを師匠様が助けて呉れたのぢやアねへが悟空思ふことを言ふせ助けて呉れたと思ふから是まで命を救出して何んかに助けて居るか知れやアしねへ師匠の縁を切つて見ればもう師匠でも何でもね物は返さねへ師匠の縁を切つて見ればもう師匠でも何でもね

一 悟淨「さういふ話へは仕方がねへ叶はねへまでも俺は荷物を取返してお前の首を貰つて行くぜ 悟空何を云やアがる此河童め其様なふとを云ふど是れだぞ」と響を固めて沙悟淨を撲つた悟淨は 悟淨野郎覺悟をしろと熊手を振上げたることにして悟淨へ打つて掛る悟淨カラ〜と笑つて 悟淨何をしやがる汝等百人來たつて驚ろくのぢやねへ如意棒を取出して二つばかり打合はしたがもう叶はぬ悟淨道々の体で熊手を担いで逃出した 悟淨ア、痛ゑ相變らず強えや何うも手の早いこと何時探りやアがつたか人の頭をボカリやつた頭が曲つたやうだ、コイツは大變だ今更師匠様の所へ歸つて荷物を取返さことは出来ません野郎の首を持つて來やうと思つたら野郎は打撲られましたと云つて歸らうものならアノ八戒の野郎に何様おことを言はれるか知れねへ、…………さう〜 齊天大聖のこ

どに付いては普陀洛山の觀世音様が親分だ是は一つ觀音様の所へ行つて歸しをして觀音様から悟空を呼んで叱責を言つて貰はうソレが宜いと當人氣が付いたものでございまそから沙悟淨も雲へ乗るの術を心得て居るから南海の普陀洛山へ罷歸し、雲を下つたることにして既に竹林に入らんと致しまそに童子之を見て 童子「オイ〜其處へ來たのは沙悟淨かい 悟淨、左様でございまそ、エ、御前様お在でございまそか 童子「ア、今齊天大聖と恭を圍つて在つしやる 悟淨「エ、ッ誰れと…… 童子「孫悟空と今恭を圍つて在つしやる 悟淨「恭を圍つて……へエー………… 童子「何がへエーだ 悟淨「齊天大聖が居まそか 童子「ア、居る 悟淨「恐れ入りましたが一つお取次を願いたいもので………… 童子「待つてお在で 童子「奥へ參つて 童子「申上げまそ、沙悟淨が参りました 菩薩「悟空何うぢやもう其方の世に

西

遊

記

出る時だ悟淨が迎いに参つた 悟淨ア、左様でございまそか
 菩薩此方へ通せ童子の案内に連れて沙悟淨來つて様守を見る
 と悟空其所に居て 悟淨悟淨能く來て呉れた其後師匠様は變
 ることではないか俺も大きに言過ぎたので親分から大層叱られ
 た説を願つた所が先方から今に返答があるからソレまで此處
 に居ると仰有るから暫時此處に居たが能く來て呉れた道中變
 ることもまいか 悟淨阿兄冗談言つちやア往けねへ此様ふと
 とを往つては困るぢやねへか 悟淨何が困る 悟淨其様なこ
 とを云ふくせに何だつて師匠様を撲殺したんだ 悟淨何と
 と 悟淨何だつて師匠様を撲殺したんだよ 悟淨沙悟淨寐惚
 けちやア往けねへ悪いと思つたから此通り觀世音様へ願ひ
 申して説をして貰はうと云ふのだ師匠様を殺すどころぢやね
 へ 悟淨お前は水簾洞に居たらう 悟淨ナニ彼時から此處に

西

遊

記

居るんだ 悟淨へエー是は不思議だ 悟淨何が何うしたんだ
 悟淨實は斯うく 斯う云ふ譯だ 悟淨フーン 悟淨水簾洞へ
 行つて見るとお前が居たせ居たから其荷物を買つて行かうと
 思つたら二つ三つ張倒された餘まり口惜しいから熊手を持つ
 て打合つたが叶はねへ實は普陀洛山の菩薩のお力を借りてお
 前に異見をして貰はうと思つて來たんだ 悟淨老聾ちやア往
 けねへぢやねへか俺は今日で四日此處に居て何處へも行きや
 アしねへ 悟淨さうか是は奇態だ菩薩之を聞き遊そばして
 菩薩ナニ華果山水簾洞に孫悟空が居る此處に居るのは何んだ
 悟淨私くしは悟空でございまそ 菩薩是は不思議だ 悟淨餘
 程不思議で…… 菩薩斯う致せ悟淨汝案内をして水簾洞へ參
 り悟空と同道致して其水簾洞ある孫悟空と云ふ者を見届ける
 悟淨飛んでもねへ出店を拵らへやがつて何だと思つてやがる

サア行かう 菩薩時に依らば余が戀つて事の様子を見受けて
 遊ばせ、又三藏へ對し詫をしてやる兎にあれ悟空が二人居る筈
 はさいから…… 悟空宜しうございませ直ぐに是から支度を
 して孫悟空、沙悟淨と二人雲へ乗りましたることにして走らし
 て水雁洞へ乗込んで来た 悟淨サア見ねへ阿兄、彼處だ、居
 る、 悟空居る…… 悟空様子を見ると石上にあつて多くの
 小猿を集めて酒を飲んで居る齊天大聖孫悟空唯今入來つたる
 悟淨悟空の二人を見て 偽悟、ヤイ何だ其處へ連れて來たのは
 …… 其處に來たのは何者だ 悟淨何者ッ…… オイ何方だ悟空
 此時に至り様子を見て居たが大音を揚たることにして 悟淨
 己れ偽悟空吾が姿に變じ此所に在つて大勢の小猿を對手に圍
 裏を爲し、却つて吾に向つて何者とは何事なり、吾は齊天大聖孫
 悟空だ 偽悟黙れ拙者が上天を騒がしたる齊天大聖孫悟空を

第八席

り汝は何方より來つた 悟空己れ不埒な奴だ、拙者が悟空だ、爾
 へ這入つて居た彼の沙悟淨見ると少しも違はせ、恰然然に影の
 寫るが如く右を見て大聖悟空左を見て大聖悟空でござい
 ませ、それから沙悟淨熊手を投出して 悟淨厄介なことが出來た
 悟空己れ偽悟空覺悟をしろ 偽悟己れ偽悟空覺悟をしろ、兩方
 同じことを言つてる、忽ち如意棒を取出した、兩悟空が此所
 に争ひを致し、此後如何相成りませうか、

偽悟空も中々通力自由の魔性にして孫行者と姿を同じう爲し
 又闘いを爲すと雖も劣るゝとなく之が爲に大きに人々に於
 ても驚ろき、何方が眞の悟空あるかと云ふ所から兩人上天に至
 り、まして諸天神に見えて、何方が悟空あることを能はぬ、依つて
 違が之を見て、何方が悟空あることを能はぬ、依つて

兩人是非に及ばせ、此所を退散して觀世音の御許へ罷越して南
 海の觀世音へ此事を告げる、觀世音又緊箍咒の呪咀をして頭
 痛む方が余たくの悟空なりと云ふので緊箍咒の呪咀をすれば
 兩悟空共に其所へ倒れる愈々困じました、是非なく兩名共に西
 天竺へ罷越して如來に見ゑて此事を訴へた所が如來は又別段
 の徳を備へ且つ術を知る人でございませうから如來の御前へ
 來て始めて此偽悟空の正体を現はしました、全たく彼は蜂の怪
 物でございませう、悟空と姿を同じうして諸方へ参りまして改
 めて貰ひますことや如來の前へ出まして術を較べる所は餘程
 長うございませうし重複に涉りまするやうな所で全一ことを繰
 返して厭んで居るのも如何でございませうから此邊は極く大略
 をして申上げます、如來の御前に遂に偽悟空の姿を現はしたに
 付いて孫行者大きに怒り如來の命を受けまして此密蜂を退治

致しました、三藏を始め一同誠に悟空の志趣の正しきを喜ば
 ます、唯此阿兄の癖と云ふのは動もすると腹立ッポイそれ
 故に右様師匠の許を勘當を受けました、菩薩の御言葉を下し
 置かれまして再び三藏の供を致すみにありました、又依裝三
 藏も胸中に何うも八戒や沙悟淨ばかりでは西天竺へ行くと
 がむつかしい、肉体として十萬億土と云ふ所へ参るのでござい
 まるから道中何う云ふ怪化が出るかも知れぬ、便りに思ひま
 すのは孫行者一人でございませうから今は三藏に於ても心を和
 らげ悟空を連れらることになりました、孫悟空のお話しは我々
 のお話を致しませう、切ソレより月日を取ね主従四人の者西の方
 を指して急ぎ参りませう、時しも秋の末でございませう、追々
 なりませう、管でございませう、今日日は裸体でも
 行けば行くは追々参りませう、今日日は裸体でも

西

遊

記

歩むぬる位に思ひ何うも是は疑だと思召した三藏後ろを見
 返り申したるよとにして三藏汝等何と思ふ實に今日の陽氣
 は暑中にも勝る位行んで汗が出る如何として斯う暑からう
 悟空其所へ出まして悟空エ、お師匠様是は陽氣の暑いので
 はささいません何か是は變動があり升せ三藏フーン悟空
 彼處に茶屋がございません少し休んで老爺に様子を聞いて
 見ませう三藏ソレが宜からう山の麓に一軒の茶店がござい
 ません其茶店へ入つた老爺是はまア皆様何方にお出
 になさす三藏吾々は西天竺まで参る老爺何うも遠い所
 へお出にもませませぬ長く御道中を参りますか三藏暫らく
 旅を掛けて居る大分此邊は暑い老爺へエ三藏何で此様
 に暑い老爺へ、左様でございませぬ此處は四季に掛は地獄く
 暑い時がございませぬと云ふのは是から先に火焔山と云ふ山が

西

遊

記

ございまして八百里四方が燃えて居りませぬ三藏エ、八百里
 四方が燃えて居る悟空其所へ出て来たが悟空老人何か火
 焔山と云ふのは八百里四方もあるソレが炎にて居ては通る
 どが出来ない老爺何うして通るとあるではございませぬも
 う是から六十里お出にありませぬ火の炎にて居る所へ出ませ
 貴所方は逆も西天竺へ行つしやるかんと思ひも依りませぬこ
 どで……三藏フーンさうして見ると此邊りには五穀なんど
 云ふ物も實りはしまし全然人家などもなまらうなものだが
 其方等は能く此邊りに居る三度の食は他の國からでも送り届
 けるのかい老爺さう云ふとはございませぬ他國から五穀
 を買うかどと云ふもなつては中々居られるものではござ
 いませぬソレは矢張五穀は此所で出来ませぬ悟空之を聞いて目
 に角を立つた悟空ヤ、老爺貴様は嘘ばかり吐く四季の差別

かく炎々ど燃て居る火焰山に五穀が成就すると云ふ傳はあり
 何うしてソレが出来る老翁、イエそれは旅僧が話してござい
 ますから申上げますか唯か聞きなると年中炎えて居ります
 火焰山此邊りに居ります者が麥一掴み取れやう筈はございま
 せん、ソレは又火を消しまさる時がございます悟空、フーン此
 を消す……老翁、左様でございませぬ、此火焰山の直き傍でござ
 いまして翠雲山芭蕉洞と云ふ所に鐵扇仙人と云ふ人がござい
 ます、此お方の所持して居ります芭蕉扇と云ふ團扇で此火焰山
 の火を煽ぎますると一度煽ぎますると忽ち火が消えて仕舞
 ひます、再び煽ぎますと風を起しませぬ、三度煽ぎますると忽ち
 間に大雨になりませぬ、スツカリ水の爲に地の濡りました所に五
 穀を蒔いて愈々ソレが取上がつて仕舞ひます、仙人の所へお
 禮に行くと仙人が再び火を放ちませぬ、スルと又半年でも三月

でも此通り炎々て居ります、其鐵扇仙人と申しませぬ、お方が此
 火を自由に致します悟空、フーンぢやア其仙人の持つてゐ
 團扇で煽ぐと消ゆる平常消して置いたら宜からう老翁、さう
 参りませぬ、其團扇で煽ぐと云ふ條、其芭蕉扇を借りに参りませ
 には大變のみとて供物を澤山持つて行きませぬければ團扇を
 貸して呉れませぬ、ソレゆゑ誠に不便でございますと入用の
 おい時に別段團扇を借りることもございませぬから其儘にし
 て置きませぬ、話を聞いて居りますか其鐵扇仙人と云ふのは女
 だと云ふ説がございませぬ、さうぢやない、亭主の名前だちんと申
 しますか何にせよ巨細のことは存じませぬけれども芭蕉扇で
 煽ぎますれば忽ち火は消ゆませぬ悟空、其仙人の居る翠雲
 山芭蕉洞とか云ふ所は此處から何の位あるエ老翁、左様でござ
 いますと、千二三百里もございませうか悟空、何うしても外の

西

遊

記

みどちやア消えあいかい 老翁何うしても消えませぬ世燕扇
 で煽ぎませれば消はます 悟空さう事が極つてりやア安い師
 匠様はじめ一同此處に待つて、下さい一寸行つて替燕扇を借
 りて來ませう 三藏悟空又早まつたるとを致さぬ 悟空早ま
 るにも早まらぬいにも其團扇で煽がなければ消はあいと云ふ
 さら團扇を借りて來るのが一番でございませぬ、……老翁さんま
 だ、店は閉やアしまし 老翁まだ早うございませぬから閉いませ
 ん 悟空少し位遅くあつても店を閉はせに置いてお呉れやア
 一寸行つて來るから…… 老翁へエー旅僧何方へお出にあ
 らぬので 悟空翠雲山へ行つて仙人に合つて來やう 老翁兀
 談言つちやア往けません、千二三百里あるのでございませぬ一寸
 行つて來るなんて…… 悟空雜作あ、一時間掛りやアしまし
 老翁へエー…… 悟空ちやア行つて來ませぬ悟空忽ちちの問法

西

遊

記

を結んで雲を呼んだ其雲へ乗ると方角を聞いて置いたから其
 儘出て行つて茶店の老翁驚ろいた、ア、扱は羅漢ださう云ふか
 方であるか此人々は於ても何方も羅漢に相違あいとありまし
 て老翁に於ては頻りに之を拜しまさる位扱悟空は其儘に致し
 て教はつた、通り翠雲山と云ふ所へ來た雲から下つて何處に芭
 蕉洞と云ふのがあるか知らん來て見ると一の洞がありまして
 傍の所の立石に翠雲山芭蕉洞と書いてあるから、ア、此處に相
 違あいと思ひ見ると鐵門が嚴重に出來て居りませぬ 悟空少々
 御免下さい、……何だ……出て來たのを見ても一人の小怪
 物 小怪何處から來たんだ 悟空エ、老翁は御在なさいませ
 か 小怪ウン老翁は在つしやるが何處から來た 悟空私くし
 は唐朝の依斐三藏と云ふ人を送つて西天竺まで參るのでござ
 いませ所が此火焰山と云ふ山へ通り掛りました何が分火が

西

遊

記

えて居て仕方が悪い承まはりませれば此方の寶物の芭蕉扇で
 煽げば消ゑると云ふことで一寸其團扇をお貸しあすつて下さ
 い 小怪「ナニ……」 悟空一寸其團扇を貸してお呉んなさい
 團扇ぢやア往けません 小怪誰が濫團扇を貸す大仙の寶物と
 する芭蕉扇を濫りに貸すことは出来ぬ 悟空お前が其様お
 ことを言つたつて往けぬへ、與へ行つて取次ぎやア宜いのだ
 コゝくすると叩つ殺そせ 小怪何だ此奴は……「話をして居る
 所へ其所へ出て来たのは長なる髪を下げて年齢五十ばかり女
 でございます 女何を其處で申して居る 小怪へエ彼所へ参
 りました孫行者と申します者芭蕉扇を貸して呉れど申すの
 で……」言ふと彼の女、暫時の間悟空の顔を見て居たが 女其方
 は齊天大聖ではないか 悟空御存じでございませるか、知つてお
 在なざるなら別段に名乗ることはございませぬ、私くしは齊天

西

遊

記

大聖孫悟空、依獎三藏の供をして是から西天竺へ行くのでござ
 いと七が火焰山へ通り掛つて何分にもあの通り火が炎あて居
 て困るのでございませぬが一つ芭蕉扇と云ふのをお借り申した
 いもので…… 女ならん 悟空へエ 女ならんよ 悟空往け
 ませんか 女其方に付いては色々恨みがある此國へ来たの
 を幸ひ唯今より汝の肉を裂いて食うからさう思へ 悟空冗談
 言つちやア往けませぬ、猿鍋をして食はれて堪るものか向兩國
 の豊田屋へ行くとある何ぼあんだつて鍋にされて堪るものか
 お婆さん其様なことを言はないで貸してお呉れ 女お婆さん
 とは何だ芭蕉扇を其方へ貸與へること出来ないと云ふのは
 其方は知るまいけれど吾が爲には一人の子供の敵と思つて
 居る其方出會次筋に纏りたいと思つて居た所だ、芭蕉扇を貸す
 ところでは無い、今汝の肉を裂くと思ふ左様心得ろと云ふと

西遊記

右の女は其儘に荒々しき姿になりました。彌扇仙人は偽り其
羅刹女と云ふ奴だ再び奥へ参るかと思へば現はれ出でたる
様子を見ると小襖を高く揃折り上げたることに致して両及の
剣を廻して其所へ来たる様子悟空カラ〜と嘲笑つて 悟空
何だど、肉を食うと籠棒めへ、汝見たやうな奴に肉を食はれて
るものか、貸せば宜し貸さなければ此窟を叩つ壊して仕舞うぞ
といきなり耳の中におりました。如意棒を取出してプーンと
一つ振ると、彼是れ三間ばかりの鐵の棒に致して羅刹女を對
に打合つた。羅刹女は女ながら一生懸命打合つて居たが女に
稀なる腕前でございませぬ。流石に齊天大聖次第々に打込んで
来る其中に羅刹女は度々心付たから体を開いて忽ちちの間
用意の芭蕉扇を取出した。なりなり呪文を唱へて孫悟空の方に
向つてプーンと煽ぐとさしもの齊天大聖孫悟空プーンと飛ん

西遊記

だ 悟空、世けね〜、往けね〜と云ふ中に重ねて二つ三つ煽
がれると恰然大風の節に紙を飛ばせやうと、梅悟空はさの者
だ、これをも留めることが出来ぬ、ド、ド、ドと落ちた。悟空
ア、痛え〜、酷い目に逢つた。何て〜圓扇を持つて居やアがる
ん、是までの間餘り物に驚ろいたこと、はね〜があの圓扇には
驚ろいた、又此處は何て〜山だ見たこともね〜山だが……ハッ
な此處は須彌山ぢやね〜か、須彌山まで来ちやア来過ぎるぞ、
雲棚引くと申しませるから紫色の雲出たかと思ひませると御
立出でにありましたのは、靈吉菩薩、靈吉孫悟空何方へ用事が
あつて此所へ参りしぞ、悟空、是は菩薩で在つしやいませるか、
に御無沙汰を致しました。靈吉、何處へ参つた、悟空、何處へ來
たのだか分らない、飛んで來たので……靈吉、飛んで來たとは
……悟空、へエ斯う〜斯う云ふ譯で火焰山と云ふ所へ通

掛つた所が火が炎々として居て何分通れませんが芭蕉扇と云ふので
 烟ぐと火が消ねると云ふのでソレから羅刹女と云ふ者の所へ
 行つて團扇を貸して呉れど願んだ所が貸しやがらぬへソレか
 ら二つ三つ争ひました其中に芭蕉扇で煽がれると一度に飛ん
 で来たんで私くしの身体ふんぞはイヤと云ふ時は煽がれる位
 で飛ぶなんてへ出来の身体ぢやアないのでございませうが全体
 此處は何と云ふ所でございませう須彌山かと思ひませうが……
 靈吉如何にも此處は須彌山だ 悟空須彌山でございませう大
 變飛んで来たせ、火焰山から此處まで何の位とございませう
 五万三千里餘ある 悟空五万三千里……飛ばしヤアがつたな
 何うでございませう、あの芭蕉扇で煽がれても飛ばないやうな
 工風はございませうまいか 靈吉汝固より徳僧の三藏を伴ふて
 遠く西天竺大雷音寺へ至ると云ふのは何れで難義であらう

ためて其方へ私に薬をやる 悟空へエー薬と云ふのは何で
 さいませ 靈吉其昔如来よりいたして吾れ申付けたる茲に定
 風丹と云ふものがある 悟空へエー 靈吉ソレを身体へ付け
 て居れば如何様なる術を以て煽ぎ飛ばさんとせると雖も動
 くべきものでない 悟空へエーそれを肌へ付けて居れば幾ら煽
 じませ 靈吉其定風丹と云ふものを肌へ付けて居れば幾ら矢
 いても動かかん須彌山よりも大丈夫だ 悟空有難う存じます
 張定風丹と云ふのは池の端の守田で賣出したものでございま
 すか寶丹の親類でございませう 靈吉さうぢやない飲むので
 はさい肌へ付けて置くのだ 悟空へエー拜見しませう……是
 でございませうか大變小さま薬でございませう 靈吉之を私へ
 包んで懐中なし落さんやうに致せ 悟空有難う存じます 靈吉
 菩薩より例の定風丹と云ふのを貰つて肌へ付けた 悟空成程

是は自分の身体で自分が重くあつたやうだ、私くしは少しも早く
 火焰山の火を消して通るゝに致しませう、又お目に掛りま
 す、御免なまつて……其儘に致して此所を立出で勸斗雲に乗つ
 たることに致して再び翠雲山へ罷越した芭蕉洞の所へ來ると
 ドン／＼／＼ 悟空、サア出る、羅刹と云ふ阿婆ぢれ女出る
 齊天大聖孫悟空此所へ罷越した速かに芭蕉洞を貸せば宜し、貸
 さざるに於ては其方の首を引抜くからさう思へ 羅刹己れ體
 き奴もあるもの哉再び此所へ來つて吾へ對して右様暴言を吐
 くに於ては許さん吾れ一度煽いだる者間も無く歸ると云ふは
 今日まで知らせ汝如何ある法を以て此所へ歸つた憎くい奴だ
 覺悟をしると兩刃の劍を廻して其所へ出た悟空、鐵棒を取直し
 て打合つて居たが尋常の勝負では悟空に叶ひませんから突然
 体を後に下りましたるゝに致して用意の芭蕉扇を取出したし

口に呪文を唱へてブツーンと一つ煽いだ 悟空、ドッコイしよ
 籠棒奴其様あもので煽がれたつて飛んで行くやうなものぢや
 ぬ、サア煽いで見る芭蕉扇を取直したる羅刹女は何ほも五六
 度煽ぐと雖も常人平氣だ 悟空、ア、涼しい、良い心持ぢ
 だ、サア來い其様あもので飛んで行くんぢやぬ、羅刹大いに煽
 つて夢中にあつて煽いだが平氣なものでございませ、一本の毛
 を抜いて傍らの所へ立てし自分に於ては小さあ虫にあつて羅
 刹女の煽いで居る、芭蕉扇の上止つて居る其中に羅刹女は身
 休勞れたものでございませ、其儘に致して洞の内に遁入り
 小怪物に首付けて殿上に降りなし彼の悪猿が來ても入れて
 はあらんど言ふたがもう遁入つて來ちやつた、悟空其邊見廻し
 て、イヤ、色々なものが飾つてありやアがる、羅刹女は暫らくの
 間悟空と手合せをしたので身体勞れて居るから息が切れたと

見える 羅刹ア、水を持って小怪物心得て水を汲んで持つて来た。羅刹女は此水をかぶり呑んだ、悟空早くも考へて小さな虫にあつて今汲んで来て一口呑んだ水の中へ飛込んで居た、羅刹女知らないからガブ／＼やると悟空を呑んで仕舞つた腹の中へ進入つて来て 悟空ア、臭えや悪いものを食つたと思へて……ア、先づ是で安心だ、羅刹女四邊を見たが人が居ない、安心して居る奴があるからハナなど思ふと 悟空サア何うだ怪物女速かに芭蕉扇を貸さば宜し、貸さなければ貴様の腹の中で踊るぞ 羅刹エ、悟空何方へ参つた 悟空腹の中へ進入つたや、此處が腎の腑で此れが胃の腑だ、待て／＼此腎の腑を破いてやるから……」左右する間に腹の中で悟空跡を隠る、相撲を取る一人相撲だから隠れししいや 羅刹ヤイ！行者許せ行

考許して下さるやう、芭蕉扇を必らせ貸すから許して…… 悟空 貸すから許してやる、程度貸すか貸すなら此前へ芭蕉扇を出して置け目の前へ芭蕉扇が出て居れば飛出してやる見せなければ出ねへ 羅刹婦かに貸すことゆゑ…… 悟空手前のやうなものだから今貸すと習つたつて後で色々あつたことをしやめる只は出て行かねへ隙であければ其前へ出して置け、貸さなければ斯うするから……」と身内にあつた毛を一本抜いて隠にして又一本抜いて金柵になし 悟空サア何うだ羅刹女貸すか貸さなければ貴様の腑へ穴を開けるから……」腰を當て、肺の腑をカシ／＼叩き始めた羅刹大いに驚ろいて 羅刹ア、貸す必らさ芭蕉扇を貸すから何うぞ許して呉れ 悟空許して呉れと云ふから目の前へ出せ仕方がないから小怪物に言付けて芭蕉扇を取寄せて目の前へ置け 羅刹サア齊天大聖芭蕉扇が其處に

西遊記

あるから……「悟空腹の中から見えて居たが、イヤーあるぞ待てよ
芭蕉扇は彼處にあるけれども迂淵出ると前歯で食切らうと思
つてやがる腹の中へ道入つて居るから知つて居る羅刹、サア悟
空此處へ芭蕉扇を出した之を持つて早く立退け 悟空待ちね
へ今出るから……」羅刹女は來たら一つ食切つてやらうと思つ
て口を開いて 羅刹、サア出る 悟空今出るよ悟空考へて一本
の毛を引抜いて高帯を拵らへた、其高帯で腹の中から羅刹女の
鼻へ突込みやがつた、幾ら羅刹女だつて堪らぬ鼻の穴へ高帯
を突込まれたからハクシロ！噴嚏をするよ鼻の穴から飛出し
て突然前にあつた芭蕉扇の上へ乗りやアがつたアツと云ふ中
に体を轉じて忽ち孫悟空の姿となる芭蕉扇を担ぎやがつ
て 悟空、姐御色々有難うアアよ鼻の穴から飛出して歸つて任
御つた之を携へたることに致して三藏主従の居る所へ罷越

西遊記

した茶店の老爺は慈ろいて居る、イヤと云ふと道を急いだる
どにして火焰山の麓へ來ると八百里四方炎々と燃えて居る様
子 悟空は何うも大きいく、ドレ一番鎮して呉れやうと悟
空忽ち芭蕉扇を取上げて煽ぐと道は如何に消ゆるどころか
煽げ煽ぐ程段々火が大きくなるから 悟空此れ畜生火が起
るばかりだとは言ふやうなもの、煽げば煽ぐ程火が炎移つて
來る途には三藏主従の法衣へ火が付きさうにあつた、段々火が
盛んになるの様子でございませうから、扱は此芭蕉扇の中には仕
組があるに相違ない是は眞物でなからうと心得て再び様子
を聞くと眞正のものは牛魔王の支配するところだといふるとゆ
ゑ忽ちちの間是より牛魔王の所へ罷り越して術を較べませる

西遊記

羅刹女より受取つたる芭蕉扇の爲に次第に火が大きくなり、ありま
すので悟空も驚ろき、三藏法師も大層案じて居る。三藏行者何
うした。悟空何うも變擬を芭蕉扇で煽げば煽ぐ程火が大き
かりまそので……三藏して見るとソレは火を消す扇では
ないか。悟空何だか分りません私くしは大抵のことは分るの
でございませが……八戒悟淨の二人も。兩人さうさ、是は奇態
だ、老爺さんの話しには煽げば消えると云つたが消にも何もし
ないや、左右して居る所へ果物を待つて現はれたのが山の神に
地の神で。兩人齊天大聖賊に暫らくでございます。悟空オ、
宜い所へ来た山の神に地の神何だ持つて来たのは……山神
貴方へ差上げやうと思つて持つて参りました。悟空俺は宜い
からお師匠さんへ上げて思つて呉れお師匠さんと云ふのは彼處に居
る。山神左様でございませるか。悟空此お方が今度西天竺へ行

西遊記

きあさる人だ其處に居る八戒や沙悟淨なんぞにはやらすと宣
いおとは此方へ出せ、悉皆食つちまうから……八戒泣顔をして
八戒昔山あるものだから俺にも一つ呉れ。悟空黙つて居る
抜野郎……時にお前達が来たのは幸ひだ、實は火焰山を通らう
としてあの通りの火で通れない、先刻此茶店の老爺の云ふには
芭蕉洞に居る羅刹女と云ふのへ會つて團扇を借りて煽げば消
ゆると云ふから欺かして取つて来たが其芭蕉扇で煽げば煽ぐ
程大きくなつたが奇態ぢやないか。地神も山神も之を聞いて手
を拍つて笑つた。地神ソレは何うも行者往けかい、芭蕉扇と云
ふのは二通りある中々其羅刹女と云ふ女が容易からん女で貴
所に酷い目に遭つて左様から貸しませと云つて貸したんでせ
う。悟空然うだ。地神ソレは其火が段々大きくある方の
團扇でございます。悟空其様なものを貸しやアがつたのか

地神、空たぐの芭蕉扇と云ふのは持つて居ます持つて居ます私くしに是は渡り氣遣いはあゝ悟空、フーン 地神、御存じか
 は知りませんが羅刹女の亭主を牛魔王と言ふので……… 悟空
 牛魔王……… 何處に居るんだ 地神、此頃は羅刹女と一緒になつて居ませんと云ふものは妾を拵らへやがつて積雷山魔雲洞と云ふ所に居ます玉面公主と云つてソレは評判の女で女の方で惚れたか野郎が思付いたか知らないけれども始終其女の方へ行つてゐるものだから何うも羅刹女が角を振立てし時々喧嘩をするからお長屋の人が何んなに困るか知れませんが 悟空、馬鹿を言へ長屋があるものか 地神、あれば困るのでございませぬ、始終早稲屋が三人位這入つて居ます 悟空、何だつて早稲屋が居るのだ 地神、ソレは喧嘩をしちやア瀬戸物を壊すものでございませぬから……… 悟空、嘘を吐け 地神、其魔雲洞と云ふ所に居

て滅多に歸つて來ないので尤も其本當の圓扇と云ふもの羅刹女が持つて居るので 悟空、持つて居るので 地神、牛魔王が貴様に預けて置くけれども濫りに人に見せるおと云つてゐるのでございませぬから誰が行つたつて眞物を貸しやアしません自分の体内へ隠してゐるので 悟空、さうか 地神、デ全たくの芭蕉扇を借りてあの火を消さうと云ふには積雷山魔雲洞と云ふ所へ行つて牛魔王にお合いなとつて其話をして借りておいでございませぬ牛魔王から手紙の一つも貰つて羅刹女の所へ行つて、サア渡して呉れ、此通り牛魔王が承諾したんだと云ふことが分りさへすれば貸しますが其外では中々往けません 悟空、其積雷山と云ふのは餘程遠ぬか 地神、十二是から千四五百里もございませぬ 悟空、其位から宜い一寸行つて來やうか前邊は時々見廻つて食物でもあかつたら上げるやうにして呉れ、其

西遊記

様に掛りやアしねへ直き行つて来る貴様達が粗畧をこそを
 るど打捨つて置かないぞ 兩人何うも大禮には叶ひませぬ師
 匠様の事は守護致します 悟空粗末のあいやうにして此處に
 居る八戒だの悟淨だのは食はせさくつても宜い 八戒、オイ阿
 兄一々俺達を…… 悟空黙つてろ 悟空は委細のことを顧んで
 置いて自分にて於ては方角を聞いて直ぐに魔雲洞と云ふ所へ乗
 込んだ雲を下つて様子を見るど松柏生現つて居りまを竈に開
 たる所 悟空成程是は除かな所だ進んで行くど向ふに鉄門が
 ありまして何うも殿重なること夥だしい門が開いてる燈くか
 ら様子を見て居ると門の内から出て参りましたのは十八九に
 あります色の白い目のパツチリとした美しい女でございませぬア
 是が玉面公主と云ふ奴か知らんツカ 其所へ来たが
 悟空、オイ、女中々々此處の家に牛魔王と云ふのが居るか

欠

MISSING

西遊記

出て来たのは女ばかり、何れも十八九或は二十四五位まで
 七人其所へ出て参りまして、女サア、其處にお在なさいま
 しては冷えますから此方へお上り下さいまし。三藏イヤ、私は
 上つて居る際にならんから……女、イエ、丁度志します佛の
 日でございませから一廻の御回向を願ひまして其間に食物を
 拵へまするから是非何うぞお上り下さいましと法衣の袖を押
 へました、三藏外のみとあら振舞つても出るが志す佛の忌日一
 遍の念佛を唱へて呉れど云ふのを教は讀めぬ、食物を貰ひた
 いとは言へないもので折角留るものでございませから三藏
 然らば仰せに従つて一廻の御回向を致すで御座らうと言つて
 上つて来た女が別段に佛間へ案内をしやうではあし、唯七人の
 女が前に立ち後から繰りまゐるから三藏驚ろいて三藏是は
 何うも怪しからんこと何をする手前は出家のこととござら

西

遊

記

から…… 女宜いではございませぬか、お教なんぞは酸んでも
 酸まあいでも宜いのでございませぬ、貴所のやうな結願な方
 入来しつて下まつたのは何よりでございませぬ、何うぞ此方らへ
 ……と三藏の手を握るのがあるかと思ふと、いきなり後から抱
 付く者があつた、三藏驚ろいた日外女人國で弱つたよとがある、此
 國も又女ばかりの國ではないか、と此女達は如何なる者かと
 思ひまそと身の毛もゾツと立ちまそる位、三藏野付はさう云
 ふものでござらんから、齋飯を下されば辱じけなく、又下さらん
 どてソレまで御迷惑となれば、頂戴致さん、弟子共が向ふに待
 て居るから御免を蒙らむ、三藏怖くなつて来たから立たうとし
 た、女宜いではございませぬか、と突然一人三藏へ囁り付いた
 三藏「ヤ、是はしたり怪しからん、五戒の中の邪淫戒、是は戒むべ
 きこと怪しからんことをなさる」と言つたが三藏は一人女は七

西

遊

記

人忽ち後室へ案内を致して何か手込にも致さうとまゝ様子
 だ、依裝三藏色を變へたることにて表の方へ走らんとする、其
 に今まで物温しくして居りましたる女達、突然三藏の手を取
 て、儼と其所へ投付けた、三藏是はしたり怪からんことを……
 と云ふ中に一人は足を持つて引張る、三藏「ア、情無いお許し
 下さるやうに」と三藏聲を揚げて泣いて居る、其中に忽ち細を
 取出したることにして、三藏をグル／＼巻に縛上げ、傍らの梁の
 所へ之を釣して仕舞つた聲を揚げんとすると、雖ども猿轡を掛
 けたることにゆゑ、聲を揚げることも能はず、三藏法師胸中に、
 無い弟子共の言ふ通り、彼等に任して置けば宜かつた、我自ら
 を求めんとして、此所に來り、又もや斯様な婦人の爲に押へら
 れたるか、此婦人とても尋常の者ではあるまい、何れ怪物であら
 うと思ひまそると心悉とく消ねるばかりにありました、柱へ之

西 遊 記

を縛付けて置いてバタ／＼其邊の締りを致しませうと 甲「ま
 ア宜い披梅ではございませんか本當に美味さうな坊主が参り
 ましたよと、ア、ヤつて釣して置いて是から行をしてくるから
 殺くりお腹を空かして食ませう 乙「ソレが一番でございま
 す何う云ふふにして食ませう 甲「私は寧ろ付焼の方が宜
 からうと思ひませ 乙「私くしは付焼は食飽きて居りませから
 寧ろ蒸して一同で喫つて食べたら何うでございませう 甲「ソ
 レでは蒸して食へることに致しませう直にやりませうか 乙「
 もう刻限でございませうから行をして参りませう歸つて来て食
 べるとして……三歳之を聞いて驚ろいた愈々是は蒸されるこ
 とか何うしたら宜からうと思つたが如何にもすることが出来
 ない、其中に其邊をバタ／＼片付けまする女達は櫃の中より美
 麗なる服を取出した所が何うも一同美しい衣類を著て居り

西 遊 記

ます 甲「サア／＼早くお替なさいよ、もう遅くなるから……
 乙「其處に吾妻コートがありますから…… 丙「私くしは吾妻コ
 ートは飽きたから寧ろそのこと肩掛で行きませう此頃までお
 んせんまで吾妻コートを著て…… 丁「見つともないから著て
 お出なさい、さうでもない此天氣で降ると往けませんから……
 おんて大勢衣類の上へ吾妻コートをおを著て日本橋の白木で
 纏らへたので七人の女は外へ出て参りました此方は待つて居
 た悟空、八戒、悟淨、悟空何うしたんだな悟淨、悟淨大層遅うと
 さいませませ 悟淨、何處まで行きませうつた向ふに見える家一軒
 から疾に歸んおさる筈だが…… 悟淨、又變な所へでも師匠様
 は這入りやアしへねか知らん 悟淨、何うもア、云ふ氣象だか
 ら人にばかり物をさせちやア濟まねへど云ふ氣でお出おそつ
 たんだらうが却つて怪物にでも捕つたらソレツきりだ弱つた

西遊記

こどが出来たか、八戒、八戒、悟空、行つて見て来い、八戒、行くのかい、後生だ、阿兄、往つて呉んね、俺は眠くつて往けね、から……、悟空、馬鹿野郎、又始めやがつた、八戒、強て行けと云ふから行くが、ア、悟浄か、阿兄が行つて呉んね、悟空、悟浄は少し足を痛めて居ると云ふからちやア俺が行つて来う、悟浄、済まねへけれども阿兄ぢやア願ひ申すから、悟空、宜しく二人を其處へ置いて孫悟空は石橋を渡つて来て見ると閉つて居る、ハ、ア、變挺だと思つて四邊を見た所が此處の家一軒しらい、ど前へ廻り後へ廻り何處か道入る所があるだらうと思つて見た所が殿重に締りがしてありますから何處も道入る所が、あ、悟浄、酷いよとをしやがつたな、確か此石橋を渡つて此處の家へ道入んか、そつたに相違ない、開けられないことはあつた、悟空のみとでございませうから見ると別段に錠が下りて居るの

西遊記

何のど云ふよとはないが糸見たやうなもので懸げてある様子、悟空、引切らうと思つて手を掛けるよ、ベタ、して切れ、ばこ、う、悟浄、何だ、いは、是は、コイツは、奇態だ、お大抵おことは驚ろかね、へが、何てへ糸だらう、餘程不思議だ、暫時の間、グル、廻して居たが、果しが付か、あ、い、から、突然、聲を發して、地の神を其所へ招いた、地の神は其所へ出て来た、地神、是は誰方かと思つたら、齋天大聖、何ぞ御用でございませうか、悟空、外ぢやアねへが、今、師匠様をお連れ申して、此處まで来た所が、師匠様、が此家へ、齋飯を買ひに来たつ、つきり、歸らねへのだ、地神、へ、エ、さうでございませうか、事に依ると、ソレは、やられたんで、悟空、やられた、やられたとは……、地神、此處の家に居りませぬ、は、七人の女でございませぬ、何うも、ソレは、通力が中々あります、お師匠様は、大方、其七人の女の爲に、何うか、されおければ、宜うございませぬ、が、悟空、女が七人、局

西遊記

るのか此周圍に張つてある白い糸のやうなものを切らうと思ふと手へベタ／＼喰付くが何だい 地神蜘蛛の糸でございませぬ 悟空蜘蛛の糸だ 地神大聖御存じおければお話しを致しませう此家に居りますのは七人の蜘蛛の怪物で愈々叶はなくなるど名々脚の中から糸を出して周圍を巻いて仕舞うので是は四時経ちまゝと消えて仕舞いまゝ七人の女は今不在でございませぬ 悟空不在だ何處へ行つた芝居へでも行たのか 地神芝居なんぞへ行きやアしませぬ行に行つたのでございませぬ日に三度づゝ水行をとるので 悟空フーン日に三度づゝ水行をする師匠があるかい 地神師匠が居ります是から西の方へ向つて三百八十里を隔つて盤絲嶺と云ふ所がございませぬ其處の黄花觀と云ふ所に一人の道士が居りますと本當の仙人であるか何うだか／＼ツカリ分りませぬけれども其仙人の弟子でござい

西遊記

まも行と云ふのは是から三十里南へ寄つた所に溜垢泉と云ふ池がありませぬ其池の水を浴びて行をするのださうで私共其話には聞いて居りますが這入つたこととはございませぬ大方其處へ七人の女は行つたんでございませう大聖餘程氣を付けおければ往けませぬ七人おがら皆お同じやうな術が出来ませぬ悟空大きに有難う又用があつたら呼ぶせ 地神へ何時でも御用があつたらか呼びおすつて下さい左様なら地の神は歸つて仕舞つた 悟空フーン妙お奴が居るお蜘蛛の怪物一番行つて様子を見てやらうソレから道を急いで来て見ると成程一つの池がありませぬ其池に泳いで居るさばかり深くはないけれど皆位まで這入つてサア／＼水を浴びて居る様子見ると何れも／＼美婦だッーン成程是は見た所が大層美しいけれども怪物らしい何うして呉れやう此奴等七人共叩つ殺して仕舞は

西遊記

りか、イヤ、地の神がア、首つたやうなもの、若し此奴が
 物でないど、又師匠様に叱られる、何うしたら宜からう、此奴を先
 に退治たものか、ソレども師匠様の方を先へお救ひ申さうか、是
 はさうしやう待てよ、女と云ふものは世間へ出る時は飾るもの
 だ、ア、云ふ、美麗なもの、若て来る位だから裸体で歸る氣遣ひ
 はない、彼處にある雜物を撰つてつてやらう、さうすれば急に地
 から上るふとは出来ねへ、師匠様の方を先にして、ソレから此處
 へ来てても間に合はねへ、ことばはねへ、悟空、咒文を唱へて變化を致
 しますと、大きな鷲になつた、フウーッとして下つて来たが、女共は此
 池の中で、甲、是から歸つてお楽しみがあるネ、宜い、梅に蒸し
 て食べやうぢやないか、乙、歸りにお酒を二升ばかり取つて行
 かうか、丙、酒も宜いけれども、私しは寧ろのことお茶菓子
 に食べたいと思ふのよ、鷲になつて居た悟空之を聞いて、悟空

西遊記

化的々々蒸して食ふと云つて、ア、大變な相談をして居やがる
 悟空、怒まぢの、問七人の衣類を脱らす一、纏めにすると、其儘飛ん
 で行つた女、違は行をして居る所と衣類のある所とは違つて居
 るものでございませうから、心付かさい、悟空はドン、本所へ
 歸つて来た、八戒、悟淨の二人が、阿兄、何うしたい、悟空持
 つて来た、八戒、大層な雜物を持つて来た、何うするのだい、賣
 るのかい、悟空、賣るんぢやない、八戒、撰撰つて来たんだらう
 良、くねへ、人の事を叱言を云ひながら、阿兄はまた止まねへか
 い、悟空、何が止まねへ、八戒、撰撰つたらう、悟空、撰撰らいよ
 八戒、悪いぢやねへか、悟空、さうぢやねへ、手前達の言ふのは
 断はつて持つて来たかい、悟空、断はりやアしねへ、八戒、矢張
 同じみとだ、何うしたんだい、悟空、斯う、斯う云ふ譯だ、師匠

標が彼處の家に住るんだ、是から蒸して食うと云ふ所を見れば
 師匠様は助かつておさる、此先二三十里行くと溜垢泉と云ふ池
 があつて其處に七人の女が行をして居る、水行をして斯うく
 だど話しををると八戒頭を上げやがつて 八戒女かい 悟空
 又面を出せよ 八戒何うも阿兄ソレは怪物と極つて居たら何
 も助けることはねへぢやねへか、七人ながら殺して仕舞へば宜
 いぢやねへか 悟空ソレは宜いが怪物だと思つて万一人間だ
 と又師匠様に叱られなければならねへ、もう一度確かめてから
 殺すものは殺して仕舞う其様なものは何時でも殺せるから師
 匠の方を先にお助け申さうと思ふのだ 八戒待ちねへ、俺が見
 て来るから蒸して食うの何のと云へば怪物と極つてらア、其様
 ものを何も助けて置くには當らねへ 悟空、八戒手前行くの
 宜いが女だと思つて何かをな 八戒大丈夫だつてへまどよ

西遊記

標だと思つたんだ、猪悟能八戒だ 悟空猪悟能八戒だから往けね
 へ 八戒、だ談言つちやア往けねへ八戒の奴め熊手を担いでド
 ン／＼出て行つた、聞いた通り池の此方へ来て遠くから見ると
 美しい女がザブ／＼浴いて居る八戒目を細くして涎を垂らして
 八戒、ア！美しい女だぞ、待て／＼此奴も術を心得て居るし、元と
 水浴ぎををることば此奴の得意でございませうから、忽ちちの間
 に變化をすれば八戒愈になつて池の中へ這入つた、女が頻りに
 身体を洗つたり、浴たりして居る其女の側へ餘になつて来て、一
 番美ささうな女の所へヒタツと抱付いた、女は驚ろいて 甲、オ
 ヤ御意なさい、餘が來ましたよ、何處から來たか問扱を顔をして
 居る餘ぢやないか「ヒタツと餘の頭を叩いた、八戒驚ろきやがつ
 て、酷いふとををるゝ、又側の女の所へ行くぞ 乙、又此處へ來た
 よ」ボカリ打擲られた、是は驚ろいた、何うも往けねへ／＼ 水の中

西遊記

四

遊

記

で暇散々弄戯はうと思つたが、反對に女の爲めに八戒、鏡はボカ
 く、撲られた、何うも鏡ぢや居られねへ、ザブく、と池水が立つ
 たかと思ふと岸の所へヒラリと立現はれたる時に本相に相成
 つた、此様子を見ると七人の女、池の中に居りましたるが、女、ヤ
 アー御借許し給へ、何うぞ命を助け給へ、八戒用意の熊手を取上
 げたることにして、八戒、ヤイヤ不埒の奴があるもの哉、汝等怪物
 に相違ない、本体を現はして此八戒の熊手に掛れ、最前より能く
 も吾を打つたな、此奴等ア女は之を聞いて、女、イエ御出家を打
 ちましたる覺えはございませぬ、八戒、イヤ打たねへ、こどもはね
 へ、鏡を打つたらう、鏡は俺だ、女は之を聞いて、女、ヤアお許し
 下さい、いますやう、八戒、許すことは出来ねへ、覺悟をしろ、と八戒
 熊手を上げて一人の女を打ちに掛ると、女は身を轉じたから八
 戒打ち損じた、七人の女は互ひに目で知らせ、甲面倒だから此

四

遊

記

奴も糊つて蒸殺して、少し臭からうけれど、食つて仕舞はう、八
 戒驚ろいた、八戒、臭からうが食へど、籠棒め臭へ、こどもがあるも
 のか、云ふ中に女はヒラリく、と池より上りましたが、裸体で下
 帯一つ締めて居るだけ、ございませぬ、突然臍から白い糸を出し
 た、何うも七人の女の臍から出しまを、白い糸と云ふものは、深山
 で働らかうとして居た八戒、忽ち蜘蛛の糸の爲に巻かれて、臥
 くこと能はず、ガツク、其所へ倒れ、ましたるが、起ることも出来
 ない、泣出しやアがつた、七人の女は、其儘にして衣類を着やうと
 して見ると、道は抑も如何に衣類が一枚もないから、七人共に大
 きに驚ろいた、
 悟空、悟淨、野郎まだ歸つて来ねへな、悟淨、全体彼奴をやるのが
 悪い、唯怪物だと、言へば行きやアしねへが、女と聞いて出て行つ
 た女と来ると形はねへ奴だから、悟空、悟淨行つて見て来て、

西遊記

れ 悟淨行つても宜いけれども此通ほり足を痛めて居るから
 悟空さうだおぢやア俺が行かう悟空其儘にして元の家の所へ
 参つて見たがまだ歸つて居ない様子池の方へ行かうと思つた
 があの八戒の奴め何かして居るんだらう、蜘蛛の怪物の五
 人や七人位退治の出来ねへ奴ぢやアねへ、其中に來るだらうと
 思つて、自分に於ては早速例の家の周圍にからんである蜘蛛の
 糸を取らうと思つて見るともう時間が経ちましたものと見
 て蜘蛛の糸は無くあつた、安々と家内へ這入つて様子を見ると
 謎の如くに括されて三藏梁へ釣されて居る様子、悟空驚ろいて
 早速其所へ引下した 三藏ア、行者此所へ來つて呉れたか今
 少々遅くば此所に於て一命を取られべきものを、云々斯様、
 ノ、云ふ譯……」と云ふから 悟空エ、宜しうございませ、唯今
 より元の所へ御案内を致しませから、ソレに付いても八戒が歸

西遊記

つて参りませんから少々お待ち下さるやうにと一旦三藏法師を
 元の所へ案内を致して沙悟淨に番をさせ悟空如意棒を取出し
 て彼の池の岸邊へ参つて様子を見ると女が七人裸体で居り中
 央の所に八戒蜘蛛の糸に括まれて引繰返つて泣いて居やがる
 孫悟空忽ちちの間に如意棒を持つて此七人の女に打つて掛り
 ませる、

第十一席

齊天大聖孫悟空は忽ち前の池の岸邊へ來り七人の女怪の様
 子を見て居たがもう此度は許しません積りで如意棒を取つて
 其所へ乘込んだ様子之を見るより驚ろいたる女共は 女ソレ
 怪し氣ある者が來たり、此者もろ聞及んだる悟空と云ふ奴では
 ないか、と口々に騒ぎます、悟空大音を揚たる事にして 悟空
 汝等女怪の身を以て唐僧の路次を妨げんとするか憎き奴なり

覺悟をしるゝと突然棒を取つて打たんとする其下を掻き取りまし
 たるみどにして既に臍より致して彼の蜘蛛の糸を取らだして
 悟空を括まんと爲したる時に悟空身を變化して或は駒虫とな
 り時としては猫とあり様々に變化ををるゝとゆゑ彼の女共に
 於ては其術に破られ却つて之を押へる能はず悟空殿しく打込
 んで参りまそゝとゆゑ今は命を助がるの外あらせと心得て裸
 休の儘で西方へ趣いた悟空追掛けて眠たうとするど彼らに驚
 がれて居た八戒が 八戒阿兄女を追掛けて行かねへで俺を助
 けて呉れ漸うに聲が出るやうになつたものだから八戒泣き聲を
 揚げて頼んだ立止りました悟空考へて見ると女の怪物なを
 殺すのは何時でも宜い一つ八戒を助けてやらうと思つて 悟空
 何うした馬鹿糾られたか 八戒やられて仕舞つた 悟空何を
 して居るんだ何でもねへぢやねへか氣が付いて見ると固より

蜘蛛の糸でございませから時間を経ては消えて仕舞う八戒の
 野郎 八戒何だ是は立てらア阿兄俺も色々なものに遭遇した
 けれどさああの女は本當に思々しい女だ 悟空何うした 八戒
 何うしたつて臍の穴から糸を出しやがつてさうして人の周囲
 を括み付けた、ベタ／＼して臭くつて變挺だ 悟空ウンさうか
 師匠様が案じて居るから来い 八戒俺は一過餘にあつて池へ
 道入つて女に弄戯つてやつたら酷い奴でボカ／＼打擲られた
 悟空手前のやうな氣樂の奴はねへ此騒ぎの中で餘になる奴が
 あるか 八戒除程股ぐらへ道入り込んでやらうと思つたが此
 盛袴では命が危ねへから止した 悟空香氣あみどををるゝ元
 の所へ来て三藏に右の話ををる、扱女は逃げて仕舞うし家を
 其儘にして置いては變化の住家にあるに相違ないから焼いて
 仕舞う方が宜からうと云ふので八戒悟淨が例の家へ火を放け

西遊記

てドンくドンく燃して仕舞つた先づ是で宜いとした所で
 食物がおい、之には弱つた自分達は我慢をするが師匠が弱つて
 居る悟空師匠様仕方がございませぬ斯う云ふ時に食物を求
 めやうとせると又何う云ふことが出て来るか知れませぬから
 五十里でも六十里でも貴所は馬で行つしやい、可哀想なのは龍
 馬でございませぬ馬と云ふものは此方で物を當がはなければ食
 うみとが出来ない求めて食う譯にありません、其馬にさへ此通
 り食はせることが出来ないのでありませぬ、其所も其思召で
 何うか少しの間我慢をささい、此魔國を出ませれば私くしが物
 を尋ねて差上げますから……三藏ア、宜いとも成程行者の
 いふ通り馬でさへ此通り歩み呉れるものであるから空腹と申
 しては誠に氣の毒だ然らばと云ふので其晩に於ては此所へ野
 宿を致して西を指して参ります

西遊記

お話し別れて裸躰で盤絲嶺と云ふ所へ参りました七人の女、
 上へ来るど年の頃八十ばかりになりませぬ道士一人、道士コレ
 女が裸躰で歩くものがあるか途中で巡査に會つたら何うする
 女お師匠様誰い目に遭いました、道士何だ、女斯うく、斯う
 云ふ譯でございませぬ、唐僧が参りましたからソレを指へて、さう
 して行をしたら歸つて蒸して殿かうと思つて居りました、スル
 と池の中へ大きな餘が参りました……道士餘が来た、女ハ
 ア其餘が助倍な餘でございまして私くし其へ抱付きませぬから
 打擲つてやつたんで、さうすると其奴が本體を現はしませぬ何
 うも大きな奴でございまして、目の細い唇の厚い耳がガラリと
 下つて……道士ハ、女ソレから面倒でございませぬから
 逐蹴して仕舞はうと思つて色々言つた所が歸りませぬ、據ころ

なく糸で括げて直ぐに歸つて来やうと思ひまを七人おがら
 着物が皆お亡失つて仕舞つたんで…… 道士何うも彼處の温
 泉は時々其様おことがあるよ、ソレから何うした 女さう致し
 ますと貴所目の圓い顔の赤い奴が耳の中から棒を出して……
 道士コレコレ 待て、ナニ目の圓い面の赤い奴が耳の中
 出したらと……ハ、其れだ、殺して魔王の方から通知があつた奴
 だ 女へエー何でございませぬ 道士ソレが依柴三藏と云ふ
 僧を伴ふて西天竺の大雷音寺へ教を取りに行くよと云ふ其中で
 一番通力の勝れて居る悟空と云ふ奴だ、飽になつたと云ふのは
 大方ソレは八戒と云ふ野郎だ、宜しく、敵討をしてやる何のソ
 レ等が来たからと云ふて吾れ決して驚ろく所は無い、陀度四人
 の者を例の一薬を以て倒して仕舞うから心配を致すお 女有
 難う存じまを、何うかさう云ふことにおまつて…… 道士ア、

宜しく、大方明日あたりは此處へ参るであらう、否でも應でも
 此所を通る、通り掛つた時は之を押へる策がある、お身方がさう
 して居ると通入つて来ないから奥の一室へ通入つて隠れて居
 るが宜い 女お師匠様何うか宜しくお願ひ申しまを 道士宜
 し、と道士は之を受合ひまして七人の女を奥深き所へ隠し
 其日の中に花を飾り或は様々のものを其所へ供へ掃除おを
 十分に致しまして翌日を相待つて居ります、もう大抵来る時
 分になりまして、名香を焚いて、自分に於ては法衣を纏い、門へ出
 まして相待つて居る、其中に四人の者は此所へ通り掛るとア、
 ンと云ふ名香の香りに、まう昨日から一粒の食をも喰べせ、お出
 におりまをる三藏馬上ながらに香の香りが第一番に鼻へ通入
 りました、見ると門口へ立つて禮を致して居りまを老翁、家内は
 大府美麗に飾立つてありまを様子、馬を其所へ留めますと地

人 道士此所へお出にありましたるは唐朝より西天竺へお出に相成る徳僧と見奉まつります手前は佛を信じます者先祖より保存致してあります御佛を此所へ飾り置きましてございます何卒徳僧此坊に至り一週の教を御授け下し置かれますれば有難う存じます三藏之を聞いてヒラリと馬から下りて三藏是れはく、斯様御手向に興かり辱けなく如何にも讀經を致そでござらうと家内の様子を見ると正面に佛像を飾り花を供へ實に屈いて居ります様子三人の弟子を其所へ待たして置いて荷物の中から取出したる錦襦袢の袈裟之を懸け珠數を挿し込んだるふとでございまして教を讀んでお在なさんと三人の者待つて居る老翁に於ては大きに喜ぶんで教が終はり申そと道士サア誠とに貧家に致して差上げる物もござらんが齋だけはお参ぬらせるとやういたし申そ何うぞお弟子方も此所へ御進み

西

遊

記

下さるやう入戒や悟淨は 入戒有難う存じ申そ實は腹が空つて、仕方がないので……と云ふのを悟空が 悟空コレく、又始めやがつた 道士唯今齋を參らせるまでお茶を一ツ參らせやうからと老人茶器を取り出し菓子を其所へ置き茶を出した三藏ア、千万辱げあしと三藏其茶を飲まうとすると悟空が悟空お師匠様少しお待なさい 三藏何だ 悟空御老人へ少しお尋ね申し申そが失禮ながらお年甲斐もかい器動かと思ひ申す 道士年甲斐もない器動とは…… 悟空手前共は是から西天竺へ参り申す者でございませ、當地へ初めて参り初めてお眼に懸つたお方ソレは茶だの菓子だのと云ふものは人が來れば出たものでございませから構ひませんが始めて會つた者に貴所が香味をしないので出せと云ふのは近頃其意を得ないこと何うか茶も菓子も香味をしてから私くしの師匠様へ差上げ

て貰ひたいものでお疑い申す障ではございませぬが、變な越梅
 でございませぬから…… 道士「ア、何かを唯今私が此處へ出し
 た此茶の中には怪しいものがある。菓子の中には毒でもあると
 云ふ。弟子の仰せか。悟空「左様でございませぬ、あるとは申しま
 せんが、食物のみとでございませぬから、何うか毒味をして、ソレか
 ら師匠様へ差上げて貰ひたいと云ふ私くしの望み此處にあり
 ます。悟淨だの八戒だのは何を食つたつて構やアしません。が手
 前の師匠は大事の用を帯びて居ります、身の上何うぞ口へ入れ
 まする者なら毒味をして下さいませやう。三藏「此の時に目を怒
 らして、三藏「行者扣る、汝如何なれば左様か無禮を申すか……
 何うぞ老人許して下さるやう、手前の弟子ではあるが至つて氣
 の荒い奴、定めし御立腹であらうが…… 道士「イヤ、是は私
 が悪かつた、成程良いお弟子だ。左様申すも師を思ふ所、何うぞ其

お弟子へ叱言を云ふて下さるな、年甲斐もかい拙者が此毒味を
 して出さんのが大きに悪い、サア毒味をして進せやうから何う
 ぞお叱り下さるを其方の師を思ふは誠に感腹致す。悟空「左様
 仰せがございませぬと却つて赤面致しまを、仰せがなくなつたつて
 赤面して居る、三藏も叱りは叱つたけれども吾を思ふ所、三藏「
 老人甚だ御迷惑であらうが…… 道士「イヤ、如何にも毒味
 を致しませうから、ソレで茶を飲み菓子を取つて之を食べ
 た。道士「サア御覽下され斯の通り何も貴所方へ毒を進めやう
 と云ふのではござらん、三藏「之を見て、三藏「是は恐入つたるこ
 と然らば頂戴をそる。悟空「師匠様止したら宜しうございませ
 う、我慢なさいませ、もう少し行たら家が有りませうから、三藏「
 まだ、其様なふとを言ふ。悟空「でございませぬが、是だけの住居を
 して居るのに、獨身者で又參ると云ふふとが知れて居れば、もう

出て来て禮を施したり斯様な茶や菓子も支度をしてある所を
 見れば其所のお出を知つてるのでございませぬ、是まで往來の人
 に逢つた譯ではなし昨日お話し申した女怪が逃去りました
 けのことで、此老人が唐朝より西天竺へお出の徳僧先達から待
 受けたと云ふのは是れは其話を知つてゐる奴で餘程怪しうござ
 いませぬ、大さな聲では言はぬが三藏に話をと三藏「コレ、
 其方のやうに疑へばソレこそ水一口にても飲むことは出来ん
 佛を信じるお人、殊に年老つてお在なざるから何しに間違の
 る氣遣ひはないと小聲で言して居る中に八戒の奴め茶を
 ガブ／＼飲んで菓子もパク／＼食つてゐる、三藏も空腹であり旁
 々するから悟空を叱つて茶を飲み菓子を食へる、悟浄も其通り
 したが悟空は食ひもしなければ飲みもしない、道士行者とか
 お前は茶を飲みませらんか、悟空私くしは欲しくございませ

道士菓子ば……… 悟浄菓子も要りませぬ、胃痛でございませ
 すから成たけ甘い物は食はないやうにして居るので「悟空胃痛
 だつて………」 道士「ア、さうか、ハ、ハ、其方一人は氣が付いたと
 見える、流石は齊天大聖の官に至つた奴だ、惡猿一度三藏へ對し
 之を止むると雖も一口ありとも口中へ入れて見れば最早三
 人の者は一命は無い、此上は汝一人だ、如何なる通力ありと雖も
 も吾又妙術を以て汝を此所へ押へること最と易し、却えて居る
 と言ひながら老人ハツタと睨んだ時の顔色と云ふものは一通
 りでございませぬ、悟空之を聞いて扱ころ吾が見込通り變化に
 相違ないと思ふ其間に三藏に於ては胸を押へて苦しや地獄を
 やと仰せられ、八戒悟浄も腹を押へて痛いく／＼と苦しみ出した
 其中に老人は鈴を取上げてリン／＼と鳴しませぬ、其
 鈴が鳴つたら來いと云ふの合圖でもあつたものと見えて與に

隠れて居たる七人の女、
 女スワヤお師匠様の妙術を以て唐僧始め一同を取捕へたり、ソレ食つて仕舞へど云ふと其所へ進み来りまゝなる様子、左右する間に七人に於ては名々臍より取出したる白い糸を以て弄す。悟空を巻かうとした悟空体を轉したることにして此奴にやらせては一大事と其身を變化して空天遙かに舞上つたものでございませうから悟空だけは幸ひにして逃れた悟空ア、危い々々あんなもので巻かれて堪るものか其中に道士に於ては彼の苦しんで居りまゝなる三藏始め悟浄八戒の三人を引立て奥の坐敷へ連れて行つた様子、其間に入口の所へ十分に蜘蛛の網を張つたるみどにて入るゑを禁じてありまゝなる様子、悟空怒まぢの間百本ばかりの毛を抜いて呪文を唱へて是を自分の体に致し小悟空として、又百本ばかりの毛を抜いて之を鎌として名々

に之を持たした、
 たりとる、ソレ切れとあつたるから心得てドレ、其胸の鼻を切始めた様子、七人の女は見ると悟空が出て来た、百人ばかりの悟空でございませうから何れが本當の悟空だか分らない鎌でもつてドン、切つて居る、七人の女は是までと心得て其所へ向ふと本体を現はしたる悟空、如意棒を持つて突然前へ進んで参つたる一人の女を引拂つた何かは堪りませう身体粉の如くになつて倒れた二人一度に来る奴を左右へ拂つたから兩人此所に死したる有様、頭七人の者を残らず其所へ打殺して仕舞つた其所へ道士は出て来て見ると右の次第でございませうから大いに怒り、道士己れ悪猿、汝は一度齊天大聖の官に進みたる者ゆゑ命を助けやらんと思つたるに吾が弟子七人を殺したるから最早助くる隙にあらん、覺悟をしる悟空大音を掛け

たることにして 悟空道士汝は眞の仙人ならんを察するに怪物
 に相違あるまい、悟空の用ひる此如意棒の味を見よと突然打つ
 て掛らうとせむ時に彼の道士悟空の方を向きながら両眼を開
 いてハッタと睨んだスルと両眼よりヒカ／＼と光り物が致
 して悟空に常りまゝとせむと、さしもの齊天大聖眼が眩んで其所へ
 ドタリ打倒れた少しく眼を開いて向ふを見んとすると瞳を
 も其金光甚だしくして見るよし能はせ其体崩るばかりでと
 さいます、固より變化極まりなき所の悟空でございませから忽
 まち小悟空に爲したる毛を圓めて鎌と爲したる毛も再び之を
 纏めて一旦退散せんとしたが何方へも行くこと能はず悟空變
 化を致すと穿山餅とあつて地中へ進んで仕舞つた三十里ば
 かり地の底を歩いて漸うのこと地底の底から現はれたけれど
 も、さしもの悟空此の時の疲勞といふものは全然力も何にも致

ひて仕舞つた 悟空ウーン酷い目に遭遇したあの野郎の眼
 光と云ふものは大變なものだ、ウーン、俺はまア勞れて居て
 も何でも斯うして居るから宜いが毒を飲まされた師匠様だの
 替淨や八戒の野郎はもう大抵食はれて仕舞つたらう行つて様
 子を見やうと思ふけれども斯う身軀が弱つて仕舞つては何う
 するよとも出来ぬへ、ウーン、と呻つて居ると向ふから一人
 の老母が歩んで参りました悟空様子を見て居たが 悟空お婆
 さん、 老婆「オヤ御修行者でございませと、何うございませし
 た 悟空酷い目に遭つた斯う、斯う云ふ譯あんだお婆さん
 此近所の人から知つてるだらうが、彼處に居る道士と云ふのは
 全休何だい 老婆「おの方を御存じないと見えませ 悟空御
 存じないから聞いて居るのだ、老婆其所へ進んだることにして
 遂に悟空に向つて師弟を助け並びに彼の怪物を退治せむる法

を授ける是れ親世音菩薩の化身にして悟空是より師弟を救ひ
怪物を退治せしむる一席は次第へ引續いて申上げます。

西遊記 卷四 終

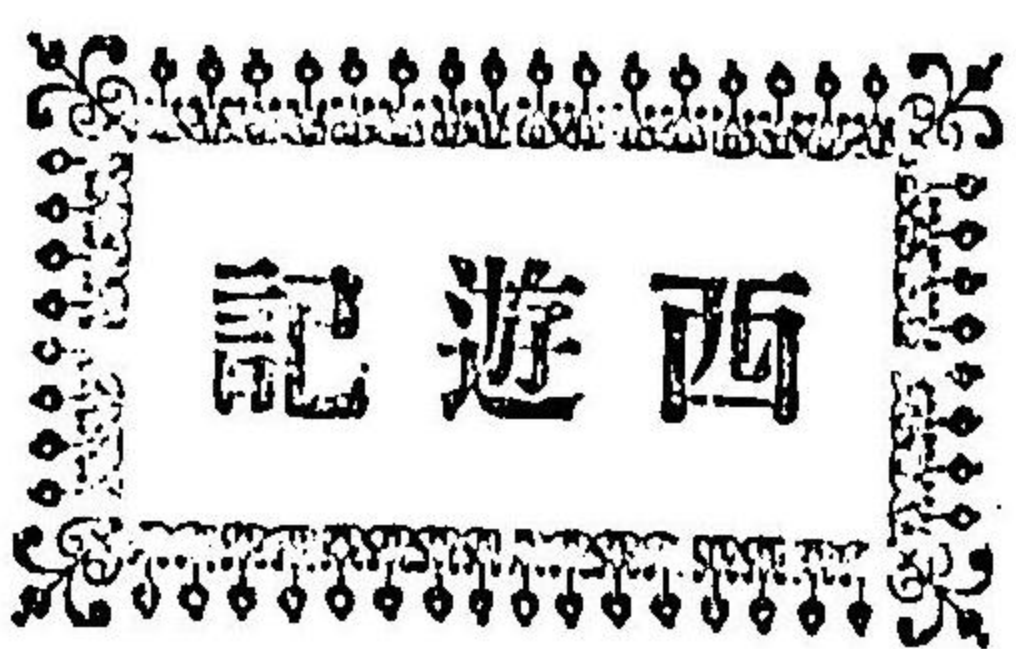
明治卅一年五月七日印刷
同年五月十日發行

東京市淺草區公園第六區三番百四
桃川燕林亭

講演者 野 萬 貴

發行者 同 神田區佐久間町三丁目卅八番
市 川 路 周

印刷者 同 淺草區森田町五番地
小 宮 定 尚



發行所

東京市神田區
佐久間町三丁目

文 事 堂

文事堂 小説部 新版書目

<p>桃川燕林講演 今村次郎速記 赤穂 四十七士傳 一冊二付 全十冊 二十錢 全部一割引</p>	<p>桃川燕林講演 大久保彦左衛門 全三冊 一冊二付二十二錢</p>	<p>伊東波瀾講演 鬼坊主清吉 全一冊 二十錢</p>	<p>錦城齋貞玉講演 梅野由兵衛 全一冊 二十錢</p>
<p>桃川燕林講演 今村次郎速記 德川十五代記 一冊二付 全七冊 二十錢 全部一割引</p>	<p>桃川如燕講演 佐倉宗五郎 全二冊 一冊二付二十二錢</p>	<p>桃川燕林講演 討鶴權兵衛 全一冊 廿五錢</p>	<p>眞龍齋貞水講演 客會津の小鐵 全一冊 十八錢</p>
<p>桃川燕林講演 今村次郎速記 太閤記 一冊二付 全二十冊 二十錢 全部一割引</p>	<p>桃川燕林講演 梅川忠兵衛 全一冊 二十錢</p>	<p>錦城齋貞玉講演 荒川武勇傳 全一冊 廿五錢</p>	<p>錦城齋貞玉講演 敵俊徳丸 全一冊 十八錢</p>
<p>桃川燕林講演 今村次郎速記 通三國志 第一卷來ル十月 二月發行仕候</p>	<p>錦城齋貞玉講演 探偵話 明治天一坊 全一冊 二十錢</p>	<p>田邊南麟講演 高橋お傳 合本 廿二錢</p>	<p>桃川燕林講演 松前屋五郎兵衛 全一冊 廿二錢</p>

<p>錦城齋貞玉講演 石井常右衛門全一冊 十八錢</p>	<p>錦城齋貞玉講演 宮崎の白石新全一冊 十八錢</p>	<p>錦城齋貞玉講演 俠客三甚内全一冊 二十錢</p>	<p>松平金彌通講演 明治太平記全二冊 一冊二付二十錢</p>	<p>松林伯四郎講演 高野長英全一冊 渡邊華山全一冊</p>	<p>三遊亭圓朝口述 怪牡丹燈籠全一冊 廿五錢</p>	<p>西郷隆盛君傳全一冊 廿五錢</p>	<p>伊藤博文君傳全一冊 十八錢</p>	<p>大久保利通君傳全一冊 十五錢</p>	<p>松林伯四郎講演 大久保利通君傳全一冊 十五錢</p>	<p>松林伯四郎講演 大久保利通君傳全一冊 十五錢</p>	<p>源平盛衰記 二十錢</p>	<p>東海膝栗毛全一冊 二十錢</p>	<p>錦城齋貞玉講演 釋迦御一代記全三冊 一冊二付二十錢</p>	<p>錦城齋貞玉講演 一刀瓶割典膳全一冊 廿二錢</p>	<p>桃川如 講演 桃川十八講談全一冊 二十錢</p>	<p>伊東隆湖講演 備前騷動全一冊 廿五錢</p>	<p>松林伯四郎講演 實話女天一全一冊 廿五錢</p>	<p>田邊南麟講演 劉益石童丸全一冊 廿三錢</p>	<p>錦城齋貞玉講演 荒木兩勇士全一冊 廿三錢</p>	<p>田邊南麟講演 岩見武勇傳全一冊 十八錢</p>	<p>田邊南麟講演 小三娘節用全一冊 十五錢</p>	<p>田邊南麟講演 敵三莊大夫全一冊 二十錢</p>	<p>伊東隆湖講演 俠客赤尾林藏全一冊 廿五錢</p>	<p>田邊南麟講演 長門四人傳全一冊 二十錢</p>	<p>眞龍齋貞水講演 朝日奈三郎全一冊 十八錢</p>	<p>天竺神宮本左門武勇傳全一冊 利生記 二十錢</p>	<p>敵阿波の十郎兵衛全一冊 二十錢</p>	<p>尾子十勇士銘々傳全一冊 廿五錢</p>
--------------------------------------	--------------------------------------	-------------------------------------	---	--	-------------------------------------	--------------------------	--------------------------	---------------------------	---------------------------------------	---------------------------------------	----------------------	-------------------------	--	--------------------------------------	-------------------------------------	-----------------------------------	-------------------------------------	------------------------------------	-------------------------------------	------------------------------------	------------------------------------	------------------------------------	-------------------------------------	------------------------------------	-------------------------------------	----------------------------------	----------------------------	----------------------------

